平成27年第13回教育委員会定例会

（8月20日開会）

台東区教育委員会

○日　　時　　平成２７年８月２０日（木）午前１１時１０分から午後６時２６分
【休憩】午後1時７分～午後1時51分、午後3時54分～午後4時5分、
午後5時55分～午後6時15分

○場　　所　　教育委員会室

○出席委員

委　　員　　長	髙　森　大　乗
委員長職務代理者	垣　内　恵美子
委　　員	末　廣　照　純
委　　員	樋　口　清　秀
教　　育　　長	和　田　人　志

○説明のために出席した事務局職員

事務局次長	神　部　忠　夫
生涯学習推進担当部長	上　野　俊　一
庶務課長	柴　崎　次　郎
学務課長	前　田　幹　生
児童保育課長	上　野　守　代
指導課長	屋　代　弘　一
教育改革担当課長 （兼　教育支援館長）	江　田　真　朗
事務局副参事	山　田　安　宏
生涯学習課長	飯　塚　さち子
青少年・スポーツ課長	山　本　光　洋
中央図書館長	曲　山　裕　道

○日　　程

日程第１　議案審議

第６２号議案　平成２８～３１年度使用台東区立中学校教科用図書採択について

第６３号議案　平成２８年度使用台東区立学校特別支援学級教科用図書採択について

午前11時10分　開会

○高森委員長　ただいまから、平成27年第13回台東区教育委員会定例会を開会いたします。

本日の会議録署名委員は、樋口委員にお願いいたします。

それでは会議に入ります。この際、あらかじめ会議時間の延長をいたしておきます。

ここで、傍聴についてお諮りいたします。

本日の教育委員会に提出される傍聴願いについては、あらかじめ許可いたしたいと思います。これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○高森委員長　ご異議ございませんので、傍聴については許可をします。

〈日程第１　議案審議〉

第６２号議案

第６３号議案

○高森委員長　それでは、日程第1、議案審議に入ります。

第62号議案及び第63号議案を一括して議題といたします。

いずれも、8月17日に開催した定例会からの継続審議の案件となります。

初めに、第62号議案を議題といたします。

指導課長より説明をお願いします。

○指導課長　それでは、第62号議案、平成28～31年度使用台東区立中学校教科用図書採択についてご説明させていただきます。

先日、8月17日の定例教育委員会におきましては、教科用図書採択に関する調査研究資料作成等の経緯のご報告と本議案のご審議につきましてご依頼申し上げたところでございますが、17日の定例会では採択の審議方法についてもご協議をいただきました。

本日は、採択をしていただくための審議をお願いいたしますが、中学校教科用図書採択の候補は9教科15種目で、発行者数の合計は66でございます。その中から、1種目ずつ発行者をご決定いただきますようお願いいたします。説明は以上でございます。

○高森委員長　ただいまの説明につきましてはご了承願います。

次に、中学校教科用図書の審議方法についてでございますが、本日は8月17日の定例会において協議した審議方法に基づいて教科用図書の採択を行ってまいります。

確認の意味で、私から審議方法について再度説明をいたします。

まず、審議する教科の順番につきましては、学習指導要領の教科の順番で、1教科ごとに、審議、仮決定をしていきたいと思います。

審議に入りましたら、各委員には、推薦する教科用図書の発行者について理由を付して挙げていただきます。

挙げていただく発行者については、1者しかない場合は1者、複数ある場合は2者までとし、優先順位をつけて挙げていただきます。

その際にご留意いただきたいのですが、今回の採択に当たりまして、私たちは、当初から一貫して、公正性の観点から全ての教科用図書の発行者名をアルファベットに置き換えた状態で内容を確認し、検討してまいりました。

したがいまして、各教科の意見交換の際も、推薦を挙げていただく際も、A者、B者というようにアルファベットでご発言くださいますようお願いいたします。

次に、推薦を挙げていただく際の発言の順序ですが、教科ごと、議席順にご発言いただき、初めの教科が議席順1番の委員から始めた場合は、次の教科は議席順2番の方が始めるというように、教科ごとに最初の発言者を変えていく方法で進めたいと思います。

この進め方でよろしいでしょうか。

（異議なし）

○髙森委員長　それでは、審議する教科の順番及び発行者の推薦方法並びに発言の順番についてはそのように進めさせていただきます。

次に、仮決定についてですが、委員全員から推薦を挙げていただいた後、委員会として採択する1者を仮決定してまいります。

3人以上の方が第1位に推薦した発行者については、過半数を超えておりますので、それをもって仮決定といたします。

ただし、過半数に満たない場合は、各委員から改めてご意見をいただくなど、協議をした上で仮決定してまいります。

なお、仮決定するまでは発行者名をアルファベットに置き換えた状態で審議いたしますが、仮決定した発行者名については公表してまいります。

次に、最終的な採択までの流れについてですが、中学校教科用図書の教科ごとの審議が終了し、使用する中学校教科用図書を全て仮決定した後に、特別支援学級教科用図書の審議を行います。特別支援学級教科用図書についても、審議の上、仮決定をしていただきます。

その後、委員会を一時休憩し、休憩中に仮決定した内容をもとに、事務局が議案を用意いたします。準備ができ次第、委員会を再開し、作成した議案により採択の議決を行いたいと考えております。これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○髙森委員長　ご異議ございませんので、本日はこのような審議方法で進めてまいります。

それでは、早速、審議に入りたいと思います。

まず、最初は国語について審議願います。

発行者は5者となっております。

それでは、各委員から、採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

まず、議席番号1番の樋口委員から順にお願いいたします。

○樋口委員　国語についてですが、全部読みました。取り上げられている題材については全ての発行者において、大きな違いはないようですが、取り上げられた題材について、ど

のように本来の国語の力、話す・聞く・書く・読む及び伝統的な言語文化を習得するのかというところで、また章末の学習目標がどれだけ明記されているかというところがポイントになるかと思いました。

そのポイントに従って順位をつけますと、1位がB者、2位がA者というところで評価をしたいと思います。以上です。

○和田教育長　今、公立学校でどのような教科書が使われるかということに社会的な関心が高まっているところでございます。とは申しながら、なかなか学習塾での学習のスピードと比べますと、公立学校の場合には、個々の子供たちの学力に非常に幅がありますので、必ずしも受験専用というわけにはいかない面もございます。

そういう意味では、子供たち、あるいは保護者の方たちにとっても、必ずしも学校の教科書を最優先していく傾向が定着し切っているとは言えない部分もあろうかと思います。

ただし、やはり公立学校の使命といたしましては、きちんと子供たちに対して、将来、社会人として必要な学力の基本的なものをしっかりと身につけてもらうための教科書ということで、私どもも一生懸命に選ばせていただいております。

国語については、まず、論理性、伝達力、それと同時に言葉を有効に使うことによって自分の思索を深めていかなくてはならない、非常に大きな役割の科目だと思ってございます。

同時に、言語教育という捉え方をした場合に、ある意味では、国語だけではなくて、全ての教科に共通する学力の強化にもつながっていくだろうと思っております。したがいまして、できるだけ言葉の力を大切にできるような指導ができる教科書を選びたいと思っているところでございます。

その観点といたしまして、まず、中学校でございますので、小学校から中学校への接続ということに、どの程度、各教科書が意識を置いているかということ。それから、読む・書く・聞く・話す等のバランスがどうかということ。

さらに、中学校になりますと、なかなか教員が手とり足とり個々のノートの指導まではできにくいという面もございますので、今回、どの教科書もノートのとり方等についても非常に丁寧に示してございますけれども、その中身についても見させていただきました。

また、やはり国語については、現在、インターネット、メールなどによって、子供たちに非常に不確実な言葉遣いが増えているかなと思っておりまして、そういうものについてどの程度許容していくのか。

一方では、本来の日本語の正しさというものをしっかりと指導していかなくてはならないわけでありまして、そういう面で、古典や漢文、あるいは敬語などについても十分に指導ができるものを選びたいと思っております。

今回、そういった観点で選ばせていただいたところ、各教科書とも、これは偶然なのかどうかわかりませんが、ヘルマン・ヘッセの「少年の日の思い出」という作品を引用しておりまして、図らずもその作品に対する指導の仕方がどうなのかと、後追いの説明や解説

なども比べてみましたところ、結構な違いがあるという感じがいたしました。

そういう中で、それぞれ丁寧には説明しているのですが、この「少年の日の思い出」については、作者の言葉とそれから作品の中の登場人物の言葉がいろいろ入り組んでいて、その辺りの説明が読む人にとっては混乱しやすい内容という位置づけがございまして、そういうところをしっかりと説明できるのかどうかと思っておりましたら、中には、図でそれを説明しているようなところもありました。そういうのは、本来のやり方とは違うのかもしれませんが、理解を促す上で非常に大事な説明方法だと感じたところでございます。

そういう面で、私は第1にB者を推させていただきたいと思っております。

あわせて、今回の国語の教科書の中で、メディアリテラシーのところを私は見させていただきました。そうしましたところ、1年生の段階でいろいろメディアのニュースの捉え方でありますとか、そういうことについて結構詳しく説明しているところが1者ございまして、それがC者でございました。

ほかの分野については、なかなか甲乙つけがたいところがありましたけれども、そういう面を私は大切だと捉え、第2にはC者を推させていただきたいと思っております。

以上でございます。

○末廣委員　私も、国語は他のすべての教科の基本となるものということで、非常に大事な教科であると考えております。

国語の教科ではどういうことを学習していくか、いろいろな観点があると思いますが、やはり読む・書く・聞く、話す、言葉を通じて意味を取って、あるいは解釈してという、基本的な作業をしていくということで、例えば漢字、語句、語彙、そういう基本的なものがある程度学習できていないと文章を理解していくことは非常に難しいだろうということで、まず、基本的な漢字をしっかりと教えていく、あるいは漢字の成り立ち、音訓などをしっかり教えていく、それがまず基本にあるべきであると思います。

それから本を読むということ。これも非常に大事なことで、今の子供はなかなか本を読まないといわれておりますが、読書への興味を喚起するなど、そういうコーナーが各者にありますけれども、この面も非常に大事ではないかということです。

それから、各者とも、絵や写真などを使っておりますが、視覚に訴えるということもある程度必要ではないかと考えます。

結果的に、私が第1に推すのはD者です。

今申し上げましたように、まず、漢字に関しても非常に記述が多いです。また、文法に関しても、文法というのは各者ともあまり細かく取り上げていない。まだ中学ではその必要がないのかもしれませんが、それに関してもある程度文法を、それから付録のところで、特に文法・漢字に親しもうという部分がございます。それから、話し言葉、聞き言葉の違いなどの観点からの記述もあります。

全体的には、第1にはD者、それから、第2にはC者を推します。

今までの観点で、漢字も非常に重要視していますが、言葉、語句、語彙、「広がる言

葉」とか「広がる漢字」などのタイトルで、そういうものを比較的多く取り上げているのではないかと。

あるいはまた、絵巻物や絵などを使った、いわゆる古典においても視覚に訴えるという面があるということで、2番目にはC者を推薦いたします。以上です。

○垣内委員　ほかの委員もおっしゃっていたところですけれども、やはり国語は全ての教科、学力の基礎・基本になるところですので、本区が目指す公教育としてどこまできちんと行うのかというところを考慮して採択する必要があるというふうに考えております。

各者いずれもわかりやすく学べるように工夫はされていますけれども、扱った教材、それから教え方に少しレベルの差があるように思いまして、基礎的なものから、より発展的なものまで、少しグラデーションがあるというか、それなりに各者工夫がなされていることかと思っております。

また、語彙も豊富で読み応えのある教材から、平易でわかりやすく基礎的な学力向上を目指すものまであるということで、私としては、基礎・基本がきちんと身につくというところを優先したいというふうに考えております。

その観点から見ますと、オーソドックスな編集で、学習者の主体性に配慮しつつ、基礎・基本に最も忠実で、比較的満遍なく国語力、話す・聞く・書く・読むといった国語力全般を高めるよう工夫されているD者を1位に推したいと思っております。

小学校との接続もしっかり意識しているということ、それから、読むことにも国語力の中で重点を置いているというところも台東区の読書推進にも合致しておりまして、好感が持てると考えておりますので、第1位はD者です。

第2位はB者を推したいと思っております。

読み方の学び事項などを図示するなどの工夫がなされていて、やはりわかりやすいということが重要かと思っております。また、語彙を増やすような工夫もありますし、スピーチ、レポートといった実践力の育成も可能になるという構成になっているところを評価いたしました。また、さまざまなコミュニケーションを可能にするような教材一覧もついておりますし、辞書の丁寧な引き方を説明しているところも好感が持てました。

2年生の教科書に「達人のことば」ということも入っておりまして、こころざし教育にも関連するということもありまして、B者です。

ちょっとD者とB者は悩んだところですけれども、より基礎・基本に忠実で、オーソドックスなほうのD者を1位、B者が2位としたいと思います。

以上です。

○髙森委員長　私は、国語だけではなくて、全ての教科において各教科の冒頭に特色的な視点として捉えておきたいことがあります。それは、それぞれの教科を学習する意義がきちんと示されているかどうかという点です。

国語に関しては、国語をなぜ学ぶのかということがしっかりと位置づけられているか。それがその教科書を編集した発行者の姿勢を表す重要な部分だと思って、着目いたしまし

た。

それから、そのほかの検討事項、比較項目としましては、国語という科目は全ての教科に関わる科目であると同時に、中学校の学びが、その上の学年、高校、さらにもっと言えば社会生活全般に関わっていく、とても重要な教科だと位置づけられますので、そういった視点も踏まえて、5項目ぐらい比較検討する事項を考えました。

一つは、漢字学習をしっかりとやられているかどうか。そこには既習漢字、常用漢字などの一覧表の表記があるかどうかなどといったことも含めて比較しました。

それから、現代口語文の文法事項、これがしっかりと踏まえられているかどうか。中学校でしっかりと文法を学ぶことも大事だと思います。先ほどの敬語の話もありましたけれども、とても重要なことで、中学でやらなければ、高校、大学に行ったらもう遅いと思うのです。ですから、この文法がしっかり押さえられているかどうか、それが二つ目の視点です。

三つ目の視点は、古典について、古文漢文に対してどれだけウエイトを置いているか。これが三つ目として比較しました。

それから、それぞれの教材を読み込むに当たって、確かめたり、深めたり、考えたりという、その項立てのステップが踏まれているかどうか、これが四つ目の視点。

それから、五番目の視点は、例えば、国語辞典、漢和辞典の活用方法が示されているか。あるいは、レポートや原稿用紙の書き方、校正記号の使い方、引用文の適切な引用の仕方など、そういったものが満遍なく解説されているかどうか、そういうところも比較の検討といたしました。

その結果、全体として国語の意義についてしっかりと明記した教科書もあるのですが、例えば言葉の力、言語、古典、話す・聞く・書く・読むなどのテーマ別にその学ぶ意義が紹介されている部分があったり、新しい言葉の学び、言葉をより深く理解するために「確かで自由な言葉の使い手に」といったように、これは具体的に事例を紹介しながら国語を学ぶ意義について解説している教科書になっていて、なかなか好感を持てました。

漢字学習については、ほとんどの教科書が部首や音訓などのコラムとして漢字を徹底分析したようなコーナーもあり、既習漢字、常用漢字も一覧表としてまとめられているものが多かったです。

口語文の文法に関しても、全体的にまとまってはいるのですが、やはり生徒しては文法を学んだことがどこかにひとまとめになっているほうがいいのかなということで、その総まとめ的な要素が入っているものを私は選びました。

それから、古文漢文については特に力を入れている教科書が1者ありましたけれども、あまりほかの教科書は力を入れていないということも少し理解しまして、ウエイトとしては、古典についてはそれほど重視していない部分があるのかもしれません。

そのほか、辞典の使い方、レポート、原稿用紙の書き方ということも踏まえまして比較いたしました結果、私としましては、1位はB者を選びたいと思います。

特に、3年次では、文法の総まとめが載っていたり、それから、特に1年生の早い時期に国語辞典、漢和辞典の活用法を非常に詳しく紹介したりしています。これは非常に好感が持てるところでございます。

それから、先ほどもお話がありましたけれども、各単元ごとに人物の相関図や説明的な文章を図式化して記載している「読み方を学ぼう」というのは他の発行者にない特色ではないかというところで、このB者を1位に推薦いたしました。

それから、次の2位はD者です。

D者につきましても、概ねバランスがよくとれている。口語文重視のテキストでバランスがとれているのですが、D者は古典の脚注の語注が非常に充実していて、古典を読むときにこれは参考になるのではないかということがありますので、D者を2位に推薦したいと思います。

私からは以上でございます。

それでは、ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いいたします。

〔集計〕

○髙森委員長　ただいまの集計結果につきまして、1位にB者を挙げられた方は3名、1位にD者を挙げた方は2名でした。第2位にA者を挙げられた方が1名、B者を挙げられた方が1名、C者2名、D者1名となっております。

結果として、1位にB者を挙げた方の数が3名ということで最も多く、過半数を超えております。

このことにより、国語についてはB者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等はございますでしょうか。

（なし）

○髙森委員長　それでは、国語についてはB者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○髙森委員長　ご異議ございませんので、国語についてはB者に仮決定いたしました。

それでは、B者の発行者名について、事務局お願いいたします。

〔発行者名公表〕

○髙森委員長　それでは、仮決定した発行者名について公表いたします。発行者は三省堂でございます。これにより、国語につきましては三省堂に仮決定いたしました。

書写

○髙森委員長　続きまして、書写について審議を願います。

発行者は5者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言を願います。

今度は、議席番号の順で、和田教育長から、順にお願いします。

○和田教育長　それでは、私から書写についての見解を述べさせていただきます。

書写でございますけれども、今月上旬に東京都美術館におきまして、台東区の書道連盟が主催いたします、台東書道展が開催されました。

私も開会の日に伺いましたが、そもそも成人中心の非常に伝統のある書道展なのですが、今年からは区内の全小中学校からも作品が出されておりまして、小学校低学年でも力強い作品が出ておりまして、驚かされた次第でございます。

そもそも漢字も書も中国の発祥ではありますけれども、平仮名が生まれたり、あるいは漢字も熟語や一部の文字が日本で独自に発達したことを考慮しますと、既に日本独特の文化という面もあるのではないかと思っております。

書道につきましては、まず、筆の持ち方、それから、書くときの姿勢、そして、静ひつな環境というものが重要だと考えられますが、その延長線上には、当然、書く人の心の鍛錬にも通ずるものがあるだろうと思っております。

この書写を通じて、日本語を正しく書くということと、文字や言葉の背景にある深い意味合いや文化などを学ぶことにもなっていくと期待しているところでございます。

既に書写につきましては小学校3年生から学習をしておりますけれども、中学校では行書も学ぶということで、いわば大人の文字を体得する、学校ではほとんど最後の機会だろうと思っております。そういうことを念頭に置いて選んだ次第でございます。

基本姿勢をとるときの写真、あるいはお手本の設定の仕方、また、それぞれの漢字の部首の書き方、楷書、行書例の盛り方、さらには、今はもうインターネット中心の世の中で活用する子供たちも少なくなっているのは聞きますけれども、手紙文の書き方などについてもどのように示されているかということも参考にさせていただきました。

さらには、この教科書をいろいろと見てみますと、実際にお手本をどのように学校の机の上で活用するのかということをイメージして、いろいろと現場の先生方等についても、どのような授業形態なのかを確認したところですけれども、ふんだんなスペースの中で書写を学ぶということはなかなか難しい状況もございまして、そういったことも考慮しての判断でございます。

また、今回のこの発行者の中にはそれぞれ特徴がございますけれども、私が非常に特徴的だと思いましたのが、日本建築と書の関係などについて写真をもって示しているところもあり、なかなか興味深い部分がありました。日本文化の中での視点を十分出しているのかなと思いました。

あるいは楷書、行書の例がそれぞれの者の巻末に例示が出ていますけれども、それも行書の文字だけで列記してあるところ、それから、同じ文字の楷書と行書を並べているところといろいろございます。

そういう意味では、中学生がどの形ならば使いやすいのかということも参考にさせていただいたところでございます。

そういう観点から考えまして、私は、今回の書写については、1位をC者、2位をD者とさせていただきたいと思います。

以上です。

○末廣委員　書写という教科は先生によっては、教えにくい先生もいらっしゃると思うのです。やはり先生が扱いやすい、それが第一に大事ではないかと思います。

書写というのは漢字、漢字にも楷書があって、行書があって、草書はここでは扱わないですけれども、そして、平仮名がある。いろいろな要素があるわけです。それを全て、生徒にしっかりと教えていくことは、先生にとっても大変なことだと思います。そういう意味でも、教えやすい教科書がいいのではないかと思います。

それから、いわゆる巻末に漢字の表が出てきますけれども、やはり同じ漢字を楷書と行書と併記して出すというのは、先生もそうですが、生徒にとって非常にわかりやすいものだと思います。

へんとつくりを別に並べていたり、ある発行者はあいうえお順で並べている、並べ方が違うところが結構ありますが、やはり使う者としてはどれが便利なのかということも考えたいと思います。

それから、筆遣いですね。筆遣いの例がしっかりと出ているか、だいたいは出ているのですが、わかりやすいもの。それから姿勢と筆の持ち方、そういうのも非常に重要なことだと思います。それから、お手本が多いということですね。これがある意味では重要でもあると思います。

そういったことを考えまして、最終的には、私は1番をD者、2番をC者としました。

以上です。

○垣内委員　書写は生活文化の基礎でもありますし、現実に使う実践力をつくっていくというところも非常に重要な部分ではないかと思いました。また、教材として使うという、教室という限定されたスペースの中で使い勝手がいいということも重要なのかというふうに理解いたしました。

この各者のテキストですけれども、いずれも非常によく工夫されていまして、学ぶことの意味の説明であったり、それから、身の回りのもの文字。生活文化ですからさまざまなところに文字が展開しているわけですけれども、そういった説明によって興味・関心を引くという導入部の工夫。それから、姿勢や筆などの持ち方の写真によるわかりやすい説明、さらには職場訪問などへの応用といったような工夫は共通して見られております。

ただ、幾つか差が出ているのは、大きさにより使い勝手がどうなのかということや、書式や資料などの情報量の多寡、点画などといった新たな展開が見られているかどうか、それから、文字で説明しながら考えさせる構造になっているのかどうかといったあたりがそれぞれ個性の出た部分ではないかと思っております。

この中で実践力というところに着目しまして、私は、第1位はC者を推薦したいと思います。

写真を用いた非常に詳しい説明、特にペンやボールペンなども含めて、ステップを踏んで丁寧に指導しているというところを高く評価いたしました。また、情報量も多く、先ほど教育長もおっしゃいましたけれども、日本建築と書の関係とか、それから、ほかにも学習の生かし方では、手紙、はがき、包み紙、履歴書など、なかなかほかで勉強できないようなことも含めて、多様な事例を用意しているという点も非常に高く評価できると思いました。さらに、行書に関して、特に一番使う部分かと思いますけれども、基礎的な書き方を重点的に取り上げているという点で、基礎・基本に忠実で好感が持てると判断いたしまして、第1位がC者。

第2位は、D者です。

こちらは、それぞれ工夫されておりますけれども、導入部が大変よく、使い方も明確に示されております。学習目的を明示し、考えさせる工夫があって、振り返りや目次もわかりやすい。あわせて、多様な用途、便箋、封筒、時候の挨拶、送り状などの多くの事例があって、どのように学習を自分たちの生活に生かしていくかというようなことも学べるという点で評価いたしまして、第2位はD者としたいと思います。

以上です。

○髙森委員長　先ほどの国語科と同じく、この書写についても、書写を学ぶことの意義、毛筆学習の意義がしっかりと明記されているかどうかに着目いたしました。そのほかの項目としては、六つの視点をもとに比較いたしました。

一つは、書くときの姿勢、筆記具の使用法が明記されているかどうか。その基本がしっかりされているかどうか。二つ目は、楷書の点画や字形、筆順についての解説がどうであるか。三つ目は、行書の点画、字形等の解説がしっかりとなされているか。四番目が、仮名の運筆。書き方ですね。筆遣い、字形との関連性が指摘されているかどうか。それから、書体の使い分けについての意味づけがきちんとされているかどうか。

そして、応用編。各委員からもお話がありましたけれども、資料編の部分で、例えば封書、はがき、伝票、願書、包み紙、原稿用紙、ノートからメモ、さまざまな応用編がここに記されているものがありまして、その内容がどうであるか。そのあたりのことを比較検討いたしました。

結論といたしまして、私はC者を1番に推したいと思います。

毛筆学習の意義の部分でも、2ページ目ですが、目的に応じて表現や伝達の効果を考えて筆記具を選択する意味を示しておりまして、毛筆の表現力の特色を説明しているということで、大変わかりやすく書いてあることが評価できました。

それから、書くときの姿勢、筆記具の使い方、使用法なども写真で折り込み3ページにわたって掲載している。しかも、片づけ方までしっかりと指示されているという、これは好感が持てると思いました。狭い教室で学習するときのルールをしっかりと確立している部分が評価できます。

それから、楷書の部分も、文字の外形だとか、部分部分のバランス、それから、空間の

とり方、筆で書いていない部分の、余白の部分のとり方についてもイラスト中心に具体的に例を挙げて解説されていることが評価できると思います。

２番目としまして、私はD者を選びました。

楷書の点画の部分では、軸と腕の使い方についてもこれでは説明がありましたし、それから、行書の点画、字形の部分に関しましても、最初に対応した各種点画の解説、字形、筆順の変化、点画の省略、筆脈についてイラストで解説がありました。

それから、仮名についても、5者のうちで一番詳しいのはこのD者だったと思いますが、結び、回転、そり、曲がりの筆遣いについての解説があります。

そのような視点で、C者を1位、D者を2位と私は考えます。

○樋口委員　書写は、日本語の世界の中において書くことが重要であるというのは周知の事実でありまして、この社会において生きていくために非常に重要なものであります。

その一方で、中学校で書写を教えるという立場も重要かと思います。場合によっては、この本を手にすれば、自分で全部、自己学習ができるのではないかというような非常にわかりやすい情報を盛り込んだものもございます。その一方で、教室でこのテキストを使って教える教員の立場、なおかつ、机の上でこの書写を実際に実践するというところでの使い勝手という点を考えれば、自ずからどういう教科書がいいかというのが決まってくるのではないかと思います。

この基準から、私は第1位にC者。課題もふさわしいですし、教えやすいと思います。

２番目にはD者を推したいと思います。

以上です。

○髙森委員長　ただいま、各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いいたします。

〔集計〕

○髙森委員長　それでは、ただいまの集計結果につきまして、1位にC者を挙げられた方が4名、D者を選ばれた方が1名。第2位に、C者を選ばれた方が1名、D者を選ばれた方が4名となっております。

結果として、1位にC者を挙げた方の数が4名と、最も多く過半数を超えております。

このことにより、書写についてはC者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等はございますでしょうか。

私から一つ。今回、この選ばれた中には入っていませんが、E者には楷書の点画の部分で、全てに穂先の写真が入っていますね。これは教科書の中に入っているので非常にわかりやすいのですけれども、ぜひ、先生方にはそういったことがわかるような、今は様々なメディアがありますから、うまくすれば、教科書を広げる書画カメラがありますよね、そこで筆を実際に使ってみてできるのかなと、ちょっとそんなことも考えましたので、うまく授業の中に取り入れていただければと思いました、参考までに。E者は穂先の写真が全ての点画の説明に入っているということを特色として挙げておきます。

ほかにいかがでしょうか。

（なし）

○髙森委員長　それでは、書写についてはC者に仮決定させていただきたいと思いますが、ご意見、ご異議はございませんか。

（異議なし）

○髙森委員長　ご異議ございませんので、書写についてはC者に仮決定いたしました。

それでは、C者の発行者名について、事務局お願いいたします。

〔発行者名公表〕

○髙森委員長　それでは、仮決定した発行者名について公表いたします。発行者は、教育出版でございます。これにより、書写につきましては教育出版に仮決定しました。

地理

○髙森委員長　次に、地理についてご審議願います。

発行者は4者となっております。

それでは、地理の4者について、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言を願います。

今度は、議席番号3番の末廣委員からお願いいたします。

○末廣委員　地理は大きく分けて世界と日本という分野になると思いますが、往々にして今の子供たちは地理等の世界に対する視野が割と狭いといいますか、あまり関心がないということがあると思います。やはり世界に対して大きく目を向けることが必要だと思います。

この地理の教科書としての特徴は、写真や地図、あるいはグラフ、統計表など、いずれも豊富に写真等が使われているということにある。そして地理をどういう視点で見ていくかということですね。それが重要ではないかと思います。教科書のそれぞれの特徴を表すものの一つの視点としては、それぞれコラムがありますね。そのコラムがどういうものを扱っているかということも非常に大きな観点になると思います。

例えばヨーロッパ州。世界の州のヨーロッパ州を扱うときに、特に今のEUですね、EUを強調して取り上げている発行者がありますし、比較的にアジアを重点的に取り上げている発行者もあります。それぞれニュアンスが違ってきます。

また、コラムで、未来の社会をつくるために参考になるポイントというコンセプトで、共生・環境・防災の三つの範疇でそれぞれのテーマ、例えば「二つの公用語があるカナダ」とか「震災を後世に伝える桜ライン」、そういうような関心を持てるようなタイトルでそれぞれ説明がある教科書もあります。

結論から申し上げますと、地理の1番はD者です。

それから、２番目にはA者を推薦します。

D者というのは、今申し上げた、そういう共生・環境・防災と興味を持てるコラムがあ

るということです。それからあと、「地域を探ろう」というコラムもありまして、例えば「公害の経験を生かした環境保全への取り組み」、あるいは「伝統的な地場産業から先端技術産業まで」、「多文化の共生をめざしたまちづくり」など、そういうものが入っている。ある意味で生徒の関心を引きやすいコラムがあります。そういうことで、まず、第1位にDを推します。

それから、第2位に推したA者も、そういう点ではおもしろいコラムがありますし、例えば「深めよう」というものが、各節ごとに、全部で16くらいですか、その中でも、それぞれ特に現代の問題とか、地域の特徴を扱っている。

例えば「アジアで交流する文化」、「イスラム教と人々の暮らし」、「環境に配慮されたヨーロッパ社会」、あるいは、最近話題になっていますが、水没の危機にあるとされるツバル、そういう関心を引きやすいものを通して深めていこうということです。

それから、A者では、「地理にアクセス」という、50項目もあるのですが、これも生徒の興味を引きやすいものです。例えば「解ける永久凍土」「水不足解消の工夫」とか「オリンピックと東京」、こういうおもしろい観点から問題を取り上げているということで評価できます。

以上です。

○垣内委員　地理に関しましては、地理を学ぶ意味や、この教科書の使い方、イントロダクションの部分に着目してみました。それから、もう一つは、やはり地理は非常に多様な題材を扱うので、情報量ということにも着目して、この二つから全者のテキストを見てみました。

学習導入部につきましては各者ともありまして、ただ、その内容が少しずつ色合いが違うという点はありました。使い方や、振り返り学習を組み込んでいること。それから、資料構成、書き込み、索引などの構成につきましては全てでよく工夫されていて、それぞれ特色はありますけれども、よくまとめられているということで、なかなか差別化が難しいところでもあります。

発行者によっては書き込みができる復習テストなどの工夫があったり、スキルアップとか、自由記述などの情報資料を提供していたり、それから、巻末資料もそれぞれ工夫されていて、世界遺産であったり、家畜の状況であったり、いろいろな情報量が組み込まれているという点で悩ましいところではありましたけれども、特に学習の初めの、なぜ学ぶかというところが明確でわかりやすいということ、それから、振り返り学習も丁寧で、学習内容の確認を書き込みとともに行えること、それから、コラムや解説などの情報量が豊富で、しかもわかりやすく丁寧な説明になっているという点でD者が一歩リードということで、第1順位はD者としたいと思います。

悩んだのですが、第2位はB者です。

こちらの導入部も非常によくて、生徒の関心を引く導入部になっておりますし、使い方の説明も丁寧でわかりやすい。アプローチという形で、別途用意されているところも好感

が持てました。

学習課題の設定、振り返りが用意されていて、全体的に関心を掘り起こす工夫がなされているという点は非常に高く評価されて、どちらがいいのか、丁寧な方がいいのか、好奇心をかきたてる方がいいのかということで悩みましたけれども、基礎・基本ということに立ち戻って、第1位はD者、第2位はB者としたいと思います。

以上です。

○髙森委員長　私は、まず、地理を学ぶ意義が、導入部分でしっかりと示されていることに着目いたしました。そのほかは、世界、日本の全体の部分と、それから、地域の部分。それと各単元ごとの導入、振り返りがきちんと行われているかどうか。

中でも私が一番注目したのは、地理学習の方法論、アプローチがしっかりと示されているかどうか。これは地図との関連性もあると思いますけれども、この地図のデータをどれだけ読み取る力がここで養えるかどうかというのは重要だと思いましたので、その地理学習の方法のアプローチがしっかりと示されているかどうかというところを主に見ました。それとコラムの部分です。四つか五つの観点から地理の教科書を比較検討いたしました。

結果としまして、私はD者を1位にしたいと思います。

世界・日本の全体の部分では、衣食住に関する記述が別立てになっている。これはちょっと他者にない部分です。

それから、地理学習の方法のアプローチが「技能をみがく」という25テーマで設定され、資料やデータでの読み取り方、レポートやルートマップの作成の仕方などが充実をしているという特徴がありました。

コラムの部分では、先ほどもご指摘がありましたが、羅針盤マークのコラム22テーマには、共生・環境・防災といった現代に則したテーマが紹介されています。

その他の部分としては、唯一D者のみがデジタル教科書を指導者用と学習者用の両方が用意されているという部分が挙げられてます。

それから、第2位に推したいのはA者です。

A者は、地理を学ぶ意義がしっかりと明記されておりまして「地理学習の初めに」という部分で、学習の基本や現代的意味についての動機づけがしっかりとなされています。

それから、世界全体、日本全体の部分では気候帯の一覧があって、これは非常に便利かなと思いました。

それから、地理学習の方法のアプローチも、先ほどのD者と同じように、資料やデータの解析・分析・行動力を図る「地理スキル・アップ」が16テーマ。調査学習の手引きとなる「調査の達人」が20テーマ。それから、各章末に「○○州の学習テーマは」とか、「○○地方の追求テーマは」といった課題提示が学習事項に則して考えさせ、知識を整理させる内容になっているという部分で好感が持てました。

その他、コラムの部分も、地図にアクセスが50テーマと充実しているということで、D者とA者どちらにしようか悩んだのですけれども、D者を私は1位に。A者を2位に推したい

と思います。

以上です。

○樋口委員　地理学は大学のレベルから見ますと、人文地理と自然地理という二つの分野が地理の重要な構成要素になっていると思います。中学において地理を学ぶというところで、この二つをどうバランスして教科書に盛り込まれているということが重要かと思います。

その一方で、グローバリゼーションという言葉が昨今浸透していますように、それぞれの地域、社会、国がどういう結びつきをしているのか。

そういう観点から、中学生が地理を学ぶというところでは、まず自然地理と人文地理をどう理解して、それぞれの国に関してどういう特徴があるのかというのを学ぶことが重要かと思います。それにおいて、それぞれの地域にどういう問題があるのか、課題を持っているのかというところが中学校で学べればいいかなと、このような視点から教科書を読みました。

結論からいいますと、1位がD者、2位がA者という順序で評価をしたいと思います。

以上です。

○和田教育長　私は、地理の学習というのは、そもそも領土もそうですし、いろいろな産業もそう、人口も含めて、さまざまな社会的要素が盛り込まれて、それをどういうふうにして総合的に理解していくのかということが、そもそも基本だと思っております。

そういう意味では、まず基本となる日本の国土のことを知る。日本は海に囲まれていまして、なかなか国境というものも、海の上にあるためによくわからない。国の範囲がよくわからないということも聞きます。そういう意味では、そういうものがはっきりと明確になっていること。

同時に、今いろいろと国際紛争が起きておりますが、それらは日本ではなかなか実感として湧きませんけれども、大陸の中で地上に国境がある場合、かなり地政学的な条件の中で紛争が起きていることもあるわけです。そういうことも、どうしてなのかということを子供たち自身が少なくとも想像できるような学習が必要ではないかと思っております。

同時に、人口動態、住民の移動、あるいは産業の構造、そういうことが日本の社会にとって将来を予測する大変重要な要素になっているということも知ってもらいたいと思います。

地理の学習というのは、いわば情報の宝庫の宝物をどうやって整理するのかということで、その見方をしっかりと学習できるものにしてもらいたいと思っているところでございます。

そうした観点で、今回の教科書の比較をさせていただいたところでございますけれども、まず、生徒たちが地理の学習にとりかかれる、何といっても興味が持てる教科書が重要だろうと思っております。そういう意味で申しますと、先ほどからお話にございましたが、コラムがどのように充実しているか。また、写真あるいは図表などがどのように配置

をされているのか。そういうことも非常に重要だと思ったわけでございます。

そうした中で、A者につきましては、国際理解のキーワードともなっております生活と宗教の関係等について、写真などを非常に上手に使っている気がいたします。と同時に、コラムでも「調査の達人」というコラム的な欄で、地理に関する調べ学習ですとか手法を非常に丁寧に指示していると思います。

また、「地理にアクセス」というところも、非常に興味深い内容でありまして、例えば、中国の一人っ子政策の話、あるいはケニアの農村では携帯電話が普及しているというようなところもございまして、興味を引きやすい。

地理の学習については、特定のことに関心を持つということが、様々な形で学習を広げていく非常に典型的な学習だと思っておりますので、そういう意味でも子供たちの興味をしっかりとつかめるコラムがあるのは大事なことだと思っております。

それから、地図の見方についても、各発行者ともいろいろと工夫を凝らしているのですけれども、やはり統計資料から読み取る方法を、A者においてはとても丁寧に説明をしているという感じがいたします。同時に、いろいろな社会的な課題、国際的な課題となっております少数民族の件、あるいは災害に関する考え方、そういうものについても、一通り項目を挙げながら指示をしているということで、A者を私は1位に挙げたいと思っております。

そして、これも先ほどからお話がございましたが、D者につきましては、それ以外にも近隣学習。近隣の諸国の韓国ですとか中国ですとか、そういうところの学習についても一定のウエートを割いて出しているということも含めて、2位にD者を推させていただきたいなと思っております。

1位がA者、2位がD者でお願いしたいと思います。

○髙森委員長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いいたします。

〔集計〕

○髙森委員長　報告いたします。ただいまの集計結果につきましては、1位にA者を挙げられた方が1名、D者を挙げられた方が4名。2位にA者を挙げられた方が3名、B者を挙げられた方が1名、D者を挙げられた方が1名となっております。

結果として、1位にD者を挙げた方の数が4名と、最も多く過半数を超えております。

このことにより、地理については、D者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等がございますでしょうか。

今回、選考に挙がりませんでしたが、B者のコラム、垣内委員が少し指摘されましたが、本当に生徒の興味関心を広げるためのコラムがたくさん充実していますね。パスポートの紹介といった実用的な内容から、領土・災害にわたる多彩な43テーマをコラムとして挙げられていたり、非常に興味・関心を広げるための工夫が随所に施されているB者は、ある意味、生徒に指導する先生方にとっては、こういった観点を持っていらっしゃると非常に

やりやすいのかなという部分では、もしかしたら何か参考になる部分があるかと思いますので、授業の参考にしていただければなと思います。

○垣内委員　私は第2位にB者を推しましたが、一番最初の「地理の学習を始めよう」のところで、最後に「ワクワクしますね」と書いてあるんですね。やっぱりこのわくわく感というのは、特に地理のような科目を勉強するときに、非常に重要な観点ではないかと思いますので、単に知識を学ぶだけではないというところを、ぜひ現場では少し配慮をいただければと思います。

○和田教育長　今、B者のお話が出ましたが、私は実はB者でちょっと気になったところがありました。前半部分の、宗教と生活の部分で、日本の宗教に対する説明がなかったこと。それから、これは本文だったと思いますけれども、「あなたの宗教はと聞かれたら、何と答えますか」という、そういう記述がありました。

これについては見方はあるかと思いますけれども、子供たちにとって、これが当たり前の会話なのかと思われることが非常に心配だなと思った次第でございます。

ただ、先ほどからおっしゃっているように、コラム欄は私もとてもいいなと思いました。「甘いチョコレートの苦い現実」というようなテーマは、これはおもしろいなと思いました。そういうところがありましたので、申し添えておきたいと思います。

○髙森委員長　ほかにいかがでしょうか。

（なし）

○髙森委員長　特にないようであれば、それでは地理については、D者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○髙森委員長　ご異議ございませんので、地理についてはD者に仮決定いたしました。

それでは、D者の発行者名について、事務局お願いいたします。

〔発行者名公表〕

○髙森委員長　それでは、仮決定した発行者名について公表いたします。発行者は、帝国書院でございます。これにより、地理につきましては帝国書院に仮決定いたしました。

歴史

○髙森委員長　次に、歴史についてご審議願います。

発行者は8者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

今度は、議席番号4番の垣内委員から順にお願いいたします。

○垣内委員　歴史に関しましては、この歴史を学ぶことによって、どういうことを達成しようとしているのかという目標ですね、学ぶことの意義といったようなことに着目したというのが1点あります。できるだけ客観的な史実に基づいて、多面的に歴史を理解し得る、

そういう能力を養うことが目標であろうというふうに考えておりますので、その観点を一つ含めて比較、考慮いたしました。

二つ目の観点としては、歴史というのも固定化されたものではなくて、特にこれから変化の大きな時代に立ち向かう社会人としての考え方の基礎になるようなアプローチといいますか、歴史の流れといったような感覚をきちんと身につけるということも重要であろうと思います。これが第2点目の視点です。

その結果、3点目としては、やはり情報量が多くて、そこから学ぶ生徒が主体的にさまざまな考え方を学びとれる、そういった形での教材配置、構造というのが重要ではないかというふうに考えました。

全般的に使い方、それから課題説明といったようなことも各者工夫がなされておりますし、マークとかアイコンなどを使った説明、それから課題の明確な設定。また、導入部でさまざまな説明がなされていて、この教科書をどう使うか、何を学ぶかといったようなことも書かれておりますし、振り返りなどの要約も各者あります。

ちょっと差が出たのかなと思うのは、客観的な事実をどういうふうに多角的に担保していくのか。事実というのも、見方によっていろいろ変わってくるので、そこの記述のバランス。どこか一方的なところではなくて、多面的に説明がされているということ。それで、情報量も多く、またビジュアルを使ってわかりやすいといったようなところで、若干の差がついているのではないかと思いました。

各者本当に工夫がなされておりまして、発展的な学習を可能にするものとか、関心を掘り起こす工夫とか、絵巻物などの情報も盛り込まれておりますし、確実に知識が身につくような復習の内容も含まれているというところです。

第1位としては情報量が非常に豊富で、オーソドックスな構成になっていて、章の初めに年表があって、人物、出来事のまとめがあり、確認しながら学べる。歴史感覚が身につくという点で、D者を第1位に推したいと思います。

このD者の場合は、各ページに時代スケールがございまして、この歴史の流れを何度も確認しながら学んでいくことによって、その事象がどういうふうにつながっていくのかということまで身につくのではないかと思います。また、各ページに丁寧な説明がありますので、基礎基本は着実に身につけることもできると考えております。

使い方、それからイントロの説明も導入部の説明も非常に丁寧で、記述は詳細で丁寧で客観的であるというふうに思いますので、第1位がD者。

第2位はC者を推したいと思います。

こちらも使い方、学習の目的といったような導入部も丁寧で非常にスムーズに感じました。「タイムトラベル」といったようなことで、ビジュアルも印象的で多面的に記載され、確認や振り返りも復習テストによって確実に歴史の知識も身につくという工夫もなされています。また、情報量も非常に豊富で、台東区に関しては下町資料館の資料なども使用しており、好感が持てました。索引も非常にわかりやすいと感じます。

よって、第1位はD者、第2位がC者ということで推薦をしたいと思います。

○髙森委員長　私も、最初のイントロダクションの歴史を学ぶ意義や態度・姿勢ということが、しっかりと示されているかどうかをまず第一に着目いたしました。

そのほかの部分では、歴史学習の方法論やアプローチ法がしっかりと確立されているかどうか。これは先ほどの地理と同じですね。

それから、細かなところですけれども、時代区分の表記。これが非常に便利につくられているかどうか。ゲージやスケールといったものがしっかりと入っているかどうかです。他にはコラムの部分が充実しているかどうか。導入、振り返りがしっかりとなされているかどうか。そういった全体的な部分を、まず一つ大きな視点としていました。

もう一つは、個別の部分として、時代区分ごとに、例えば原始・古代に関する記述に関しての比較、中世に関する内容の比較、近世、近現代、それぞれの内容の比較。これが客観性に基づいてつくられているか、中立な立場で書かれているか、思想的な偏りがないか、そういったところも着眼いたしました。

特に、戦争記述の問題についても比較をしまして、どのような取り扱い方をされているか。そのような視点で8者を比較検討いたしました。

その結果、私はD者を1位にしたいと思います。

歴史からの学びをこれからの社会に生かすことに歴史を学ぶ意義があるのだという、そういった動議づけがしっかりとなされているということが魅力です。

それから、歴史に対しての方法のアプローチとして特筆すべきは、西暦、和歴、そして十干十二支の干支、方位の解説が見開きで見やすく整理されている。これはほかの発行者にはなかったことです。

それから、向上を図る「歴史スキル・アップ」、調査学習の手引きとなる「調査の達人」など、これはC者と非常に似ていますけれども、充実しております。

時代区分の表記も、先ほど垣内委員からもご指摘がありましたが、全ての偶数ページの下の欄に見開きページごとに該当する時代のスケール、ゲージが示されているという特色があります。

振り返りの部分では、各章ごとに課題型のまとめとテスト形式の振り返りができるようになっている。これも特色です。細かな時代ごとの内容は、また後で議論があった場合には申し上げたいと思いますが、そのような理由で私はD者を1位に。

第2位を、私はC者を推したいと思います。

C者とD者の比較の中で、残念なところは歴史を学ぶ意義が少しC者の場合は未来志向の明るい側面ばかりが強調されていて、過去の過ちを繰り返さないという視点、過去に学ぶという視点が欠けている部分が残念であります。これはマイナスポイントになってしまいました。

歴史学習の方法のアプローチでは、「技能をみがく」というコラムで資料の読解力向上、調査学習の手引きなど、歴史研究の基本的スキルが示されている特色があります。

また、コラムの部分もこちらは充実していまして、先ほどの地理もそうですけれども羅針盤のマークのコラムに、環境・人権・平和など現代に則したテーマ別にコラムが設定されているという特色があります。

それから、振り返りの部分では、各章ごとにクイズ形式の導入とテスト形式の振り返りが設けられている。クイズ形式の導入というのは、生徒にとっては入り込みやすい工夫なのかなというところが評価されます。

その他の時代的な部分は、また後にするとしまして、このC者に関して特色的な部分があるとするならば、デジタル教科書が指導者用と学習者用の双方が用意されている点なのかなという部分で、結果として私はD者を1位、C者を2位に推したいと思います。

○樋口委員　歴史が嫌いな生徒、学生をよく見かけます。どうしてかというと、何年に何々が起こりましたということを覚えなさいというような学習があちらこちらにあるので、「そういうことは要らないです」、「今を生きていればいいんです」というような言動が私の周辺の学生にもよく見られるところであります。

歴史というのは、現代は歴史から成り立っているわけでして、その現代からいわゆる歴史を学ばなければいけないということだと思っております。

一番重要なのは、歴史を教える教員が混乱しないということが重要でありまして、全ての教科書を、特にこれは政治上のいろいろな議論がありますので、丁寧に読みました。検定教科書ですから、文部科学省の検定を通ったものでありますので、言質に関しては受け入れるということにおいて、整合性がとれた教育を行うことを我が台東区の教室でできるかどうかというところが大きなポイントであろうかと思います。

そこから考えますと、まず生徒がこの歴史の勉強をするのにあたりまして、目標及び学習した各章末においてまとめがしやすい、及び、基本ですけれども、活字が読みやすい、及び、我が国の大きな問題になっています領土問題についても、抱えている問題についての取り上げ方というバランスを考えた場合に、第1位にはD者。第2位にはE者を挙げたいと思います。

E者は小見出しのところが、例えば「冷たい戦争」、「都ではやるもの」など、世間浮きしているようで、残念で違和感があるところであります。

D者の大きなところは、歴史記述においてバランスがとれているというところで、1位に評価したいと思います。

以上であります。

○和田教育長　台東区の中学生が、必ずしも社会科の成績が良好というところまではいっていない状況でございまして、そういう中では樋口委員からもご指摘がありましたが、歴史の学習そのものに対する抵抗感があるのかなと想像しているところでございます。

歴史の学習というのは、まさに自分がどういうアイデンティティを持っているのかということと不可分なわけでありまして、自分の成育歴、それはつまり町の成育歴であり、国の歴史であるだろうと、そういうこととを引きつけて考えていけば、おのずと世の中の歴

史というものに関心が向くのではないかと期待しているところでございます。

台東区の場合には、そもそも歴史と文化の豊かさを標榜しておりますが、とりわけ江戸時代以降の文化やまちづくりというのは、大きな特色になっております。それが現在の台東区の文化、そして精神的な支柱にもなっているのではないかなと思っております。そういうことをしっかりと指導できるものであること。

さらには、今、グローバル社会といわれておりますけれども、自らの国に対する自信、そういうものをちゃんと持てるような教育もしていかないと、気持ちの上で萎えてしまうことも多くなってしまうのではないかと危惧をしているところでございます。

そういう意味では、今回、各々の発行者について勉強をさせていただいたわけですが、第1位にはC者を推させていただきたいと思います。

C者は、全体で申し上げますと、学習方法について第1章で大変丁寧に記述をしているということ。そして、学習を振り返ろうという項目が、各項非常に要領よく書かれているなと思いますので、それが単に読み終わって忘れてしまうというものにはならないだろうと思います。

それから、古事記については、言葉では聞いているけれども、なかなか中身が子供たちにはわかりにくいところがありますけれども、その内容、説話をしっかりと掲載していると思います。

もう一つは、先ほど垣内委員のお話にもありましたけども、各時代の冒頭に「タイムトラベル」という見開き2ページにわたる興味深い絵が入っておりまして、その絵がその時代のいろいろな項目を象徴している人間の行動のように見えまして、それを見るだけでも非常に楽しい、そのページを各時代ごとに比較するだけでも楽しいんだなという気がいたしました。これは私が考えます興味を引くということについて、大きな力を持つだろうなと思います。

それから、人権の問題につきましても、時代の変化に沿って女性や子供・高齢者、職業や役割などによる差別を非常に上手に説明していると思います。河原者、それから近代の琉球、あるいはアイヌについてのページもしっかりと割いておりますし、江戸時代についても「身分制社会での暮らし」ということで、解説を上手にしていると思いました。

ともすると昔の村や町の自治はどうなっているのかということが、どうも忘れられがちになってしまうのですが、C者の場合には、室町において荘園から村が成立する過程などが非常にわかりやすく書いてあり、国というだけではなく、地域がどうやって成長しているのかということの示唆も出せるのかなと思いました。

そして、先ほど申し上げた江戸時代からの文化についてでございますが、江戸時代の全体像、社会的背景について、元禄あるいは文化文政、そしてその文化の説明の中で江戸っ子を夢中にさせた娯楽として、相撲や落語、川柳、北斎、まさに本日、台東区の川柳人連盟が柳多留250周年の記念碑を落成させたばかりですけれども、台東区の貴重な文化であります川柳、あるいは北斎などについても丁寧に触れられています。

また、明治以降の文化についても、台東区に縁の深い東京藝大ですとか、黒田清輝画伯、森鴎外、樋口一葉、正岡子規、横山大観などもしっかりと取り上げてくれていることで、学習している台東区の子供たちにとっては非常に楽しい教科書ではないかなと思いました。

そして、第2位には、B者であります。

B者につきましては、巻頭に仏像美術品の写真などが充実しておりまして、非常に興味を引き、わかりやすい。そして、日本の歴史、世界の歴史というのが、宇宙や人類の歴史とどのような長さの比較になるのか。その物差しで比較をしているということも、関心を引くところであります。

また、「歴史ビュー」というコラムにおいて、いろいろと興味を喚起する内容としては適切だと思いますし、人物のクローズアップについても、例えば「なでしこ日本史」ということで、女性に焦点を当てた人物紹介も行っているところでございます。

それから、江戸文化についても浮世絵の欧州絵画への影響ですとか、平賀源内の先進性などについても、日本人の持っていた文化の中での知恵が非常に高度なものなのだということで、読んでいて勇気づけられる内容も多いのではないかと思います。

とりわけ、トインビーが第二次世界大戦、明治以降の日本が行った戦争について、一定の評価をしている部分。こういう部分について、大変重みのある記述だなと思いますし、フランシスコ・ザビエルが日本人は知識欲が旺盛だった。読み書きもできるということで驚いたと。そういうことも含めますと、日本の歴史というのも日本人にとって非常に価値あるものだったということで、子供たちが楽しく学べると同時に、自信を持った成果を得られるのではないかなと思っているところでございます。

現代的な歴史の部分でいいますと、例えば拉致問題などについても、各教科書は触れております。本文で触れているもの、コラムで触れているもの、あるいは、触れていない発行者もあるのですけれども、台東区は昨年3月に横田滋さん、早紀江さんご夫妻をお招きして、台東区の教職員の学習研修会を行いました。台東区で教職員約200人程出席をさせていただきましたけれども、大変淡々としたお話の中にも大きな感動も得られたわけでございますが、そうした研修を行っている中で、台東区がそういうことに全然触れていない教科書を選ぶなんていうことはちょっと考えられないなと思いました。

そして、最後になりますが、それぞれ歴史の教科書の最後に、結語としてどういうことが書かれているかということも私は見てみました。

C者においては、日本の人々は困難に直面しても、知恵と力を出し合って克服してきた。日本の歴史には、そうした知恵と経験が詰まっているんだ。そういうことを世界に発信し、協力していくことで、世界に貢献をしていこうじゃないかというような結語になっているところでございます。そういう意味で、C者を1位。

そしてB者については、国民が一体感を持ち続け、勤勉と礼節を大事にしてきたことが大事だと。国際貢献していくことを、そのことで世界の人々が平和に暮らせるように頑張らなくてはいけないというような結語になっているということで、B者を2位にさせていた

だいたということでございます。

以上でございます。

○末廣委員　歴史をどう見ていくかということは、非常に難しい問題があると思いますが、一つは世界史の中の日本史、そういう観点が非常に大事ではないかと思います。あとは、歴史の流れ、それぞれ世界史も日本史もありますが、なるべく情報量が多いものもいいかと思います。それから歴史の事実を見ていく上で、コンセプトをはっきりとさせていくという見方も必要ではないかと考えます。

結果として第1位はD者です。

これは先ほど申しました世界史の中の日本という、例えば出だしのところです。「世界の古代文明と宗教のおこり」、これは10ページも使っています。それから、「日本列島の誕生と大陸との交流」、これも6ページ使っているということで、世界の文明の中での日本の歴史の始まり。そういうことがいろいろわかりやすく、もちろん写真や絵入りで書かれています。

それから世界との関係ですけれども、幕末、ちょっと前の話で、欧米とロシアがどのような状況だったか。それから、ヨーロッパがアジアでどう侵略してきたか。そういう記述があって、そこでペリーが来航して、不平等条約に入る、そういう流れについて、どうしてそういうことになったのかという世界的な流れの中での日本のあり方、そういう観点から記述があるのというのは必要ではないかと思います。

あとはコラムです。「深めよう」というコラムがありますが、例えば、「現代に受けつがれる神話」です。このような観点から神話を扱っているというのはおもしろいと思いますし、それから江戸時代のエコ社会、浮世絵に描かれた風景など、いろいろな観点から見ていくという、いわゆる歴史に興味を持たせるといいますか、そういう点が結構あるということで、第1位はD者です。

それから、第2位は、もう一つ違う観点から、G者を推薦します。

これは出だしから神話という、年代の表し方から時代区分ですね。年号や西暦、干支、暦などが出てきて、神話というものが出てくる。ほかの教科書でも神話はある程度扱っているのですが、この発行者は重要視して扱っています。

これは、今まで神話は、特に戦後はある意味ではタブーのように、あまり触られていなかったところですが、最近、全体的にはいわゆる古事記や日本書紀の世界といいますか、そういうものも言われてきているということです。

それからコラムといいますか、「外の目から見た日本」というコラムがあります。古いほうでは、例えば魏志倭人伝。あるいは、さきほども出ましたが、「宣教師の見た日本人」、そういう外国人から見た評価ということも扱っている。あるいは「世界が見た日露戦争」というようなコラムもあります。

それから、「もっと知りたい」というコラムでは、「仏像の見方」、「仮名文字と女流文学」、いわゆる文字や文化的なもので興味を持ちそうなものというものもありますし、

日本人の名字の由来、「秀吉はなぜバテレンを追放したか」など、生徒が関心を持ちそうなタイトルでコラムがあります。

それから人物を中心として見ている。例えば、伊藤博文、渋沢栄一、あるいは二宮尊徳など人物を中心に、あとは福沢諭吉ですか、そういう観点で歴史を語っている。そういう見方といいますか、歴史の捉え方が非常におもしろい。いわゆるテーマ別の人物を通しての歴史、あとは地域の歴史というのもあります。

ということで、第2位にG者を推薦します。

以上です。

○髙森委員長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いいたします。

〔集計〕

○髙森委員長　ただいまの集計結果につきましては、1位にC者を挙げられた方が1名、D者を挙げられた方が4名。2位にB者を挙げられた方が1名、C者が2名、E者が1名、G者が1名となっております。

結果として、1位にD者を挙げた方の数が4名と、最も多く過半数を超えております。

このことにより、歴史については、D者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等はございますでしょうか。

○樋口委員　全ての教科書を読むと、いろいろな立場があります。先ほどからの、いわゆる日本の立場という話、日本の歴史というものは日本独自で今日まで発展したわけではなくて、絶えず諸外国、諸社会との関係で我々は成長してきた。

なぜ日本は黄金の国ジパングと言われたか。麦わら屋根の上に水滴が落ちて、その水滴が太陽の光にひかったから、遠くから見た人間が「何と日本の農家は全部金で葺いている」というような話があるけれども、新羅から日本が見えたということなんですね。

なぜ石見が世界遺産になったのか。それは銀の多大な産出量があったということです。そうすると、銀の産出量で世界遺産に繋がりましたという一方で、その銀がどこに行ったかということに何も記述がありません。もっと重要なのは、江戸東京博物館へ行けば千両箱があります。江戸時代には金・銀・銅という、今日もしあったならば大変な価値があるものばかりです。当時の江戸の人口は約80万人といわれていまして、世界で第2位の都市でした。しかし、金・銀の貨幣経済が江戸にありましたという話ですが、その後、後半になると貨幣としての金がなくなる、銀がなくなり、藩札を使うようになりました。そして明治以降になると、我が国は資源小国だという話になっている。これらのカネ・希少金属はどこに行ってしまったのでしょうか。

これがまさに歴史の勉強をするべき重要なところであろうかと思いますし、日本が1900年においてシルクの世界最大の輸出国になるのも、実は江戸時代はシルクを輸入していたという事実、その前からそうですが。こういう時代区分で歴史を学ぶ一方で、なぜ発展してきたかということについて、海外との関係で見ていくことはとても重要だろうと思

いますし、「日本人が努力して発展した」という表現がありますけれども、これは何を努力して豊かになったかというのは、やはり海外との関係だろうと思います。歴史を教える先生は、いろいろな資料や本を読んで歴史的事実を生徒に教えていただきたいと思うわけです。

特に、今日では海からのシルクロードを含めて海外との関係がございますので、そういうことはぜひとも教壇に立つ先生においては、一層の努力をして教えていただければと思います。

○髙森委員長　ほかにいかがでしょうか。

私から一つ。今回、B者とG者をそれぞれ、お一方の委員が推挙されましたけれども、私が推薦したのはD者とC者、1位、2位それぞれなんですが、B者もいいところがあって、それは歴史を学ぶ態度というところで、「歴史の地層に先人の成功と失敗の教訓が詰まっている。歴史学習は歴史のバトンを受け継ぎ、これからの歴史をつくるための始まりだ」という動議づけの仕方は、非常にいいなと個人的に思いました。この視点は全ての教科に透徹するような部分があると思いますけれども、特に歴史に関してはこういった見方をしてほしいという気がいたします。

それから、二人の委員からB者、G者の評価できる点として、「外国人が見た日本」、「外の目から見た日本」。この二つの部分の指摘がありました。確かに、外国人から評価されている日本人の方々の紹介は、非常に日本人としての自尊感情を高めていく工夫がされています。ただし、授業の中でこれを取り上げるときに気をつけなければいけないと思われる部分があって、自尊感情を高めるのはいいですけれども、それが、ともすると排他的な心情を生み出すような、あおるような、そんな潜在的なおそれもあるかなという気はしました。ですので、私はB者、G者については、そういった視点で心配な部分がありますけれども、歴史に向き合う態度は見事だと思います。

○樋口委員　鎖国というのは、あれはケンペルの「日本誌」の中に書かれた言葉を志筑忠雄が１８０１年に訳出し、使われるようになった言葉で、事実は江戸幕府が鎖国の令を出したわけではなく、貿易管理令だという。この辺りをどう教えるかは、先ほど申しましたように注意をしなくてはいけないところでございます。

こういうことが今の歴史の研究の中でいろいろな解釈として出てきていますので、それも含めて教員がしっかり理解をして、教壇で教えるべきところだと思いますので、つけ加えさせていただきます。以上です。

○髙森委員長　ほかにいかがでしょうか。

（なし）

○髙森委員長　それでは、歴史については、D者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○髙森委員長　ご異議ございませんので、歴史についてはD者に仮決定いたしました。

それでは、D者の発行者名について、事務局お願いします。

〔発行者名公表〕

○髙森委員長　それでは、仮決定した発行者名について公表いたします。発行者は、東京書籍でございます。これにより、歴史については東京書籍に仮決定いたしました。

議事進行中ではございますが、ここで一時中断し、休憩を挟みたいと思います。

なお、再開は午後1時50分といたします。よろしくお願いいたします。

（休憩・13：07～13：51）

公民

○髙森委員長　それでは審議を再開いたします。

続きまして、公民についてご審議願います。

発行者は7者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言を願います。

今度は、議席番号5番の私から順に発言をいたします。

公民につきましても、まず、私は公民を学ぶ意義というものがしっかりと明記されているのかどうかに着目しました。

そのほかの内容に関しては、社会の分野。特に規範意識、それから宗教に関する記述。政治の分野では、特に権利と義務、平和憲法、選挙、裁判、こういった事柄にきちんと的確な解説がなされているかどうか。金融、財政、社会保障の仕組みも含めての経済の分野。それから国際の分野。特に平和、国防に関する記述。そのあたりの内容を比較いたしました。

また、全体的な工夫として、導入、振り返りが的確になされているかどうか。公民学習の方法論、アプローチが明確に示されているかどうか。その他、コラム等が充実しているかどうかといった視点でも比較をいたしました。

その結果、私はF者を1位に推薦したいと思います。

F者は公民を学ぶ意義がしっかりと明記されていて、「公の視点から社会を見つめ、課題を解決し、持続可能な社会の形成に参画できる人間となるための学びである」という解説がなされています。

それから、社会の分野では、少子高齢化、グローバル化、情報化社会、持続可能社会のカテゴリーを4節に分けて問題提起をしている。全体的にバランスもいいのではないかと思います。

また、コラムの部分で、「公民にアクセス」という部分が設けられていますけれども、死刑制度、幼保一元化、ねじれ国会、尊厳死、集団的自衛権、非正規雇用など、メディアで聞き慣れたキーワードを取り上げて簡潔に解説されているのも生徒の興味を引くのではないかと思います。

それから、その他の部分として、分野関連マークというものがありまして、これは地

理、歴史の教科書にそれぞれリンクが貼られております。全体にわたって、地理、歴史との関連性を重視した構成が特色かと思います。

それから、第2位には、私はE者を選びました。

特にこのE者に関しては、地理、歴史、公民との関連性に重点を置いて、社会の仕組みの意味や役割、課題について学ぶ教科であるという定義づけがなされています。

それから、社会の分野で非常に興味を持ったのは、家族の問題です。家族の問題については、非常に詳しいかなというところです。

それと、公民学習の方法論、アプローチの部分では、さまざまニュース等の報道の読み取り方、それに関しての討論の仕方などが実践的な内容で示されています。

また、「HOW TO」という囲みがありまして、そこには「裁判員になったら」や「クレジットカードの危険性」など、子供たちが近い将来に直面するような、そういった場面で役立つ知識がまとめられています。

それから、先ほどのF者と同じように、地理、歴史とのリンクが貼られていまして、「地理・歴史をふりかえる」という目印が明示されているという特色があります。

したがいまして、私としては1位をF者、2位にE者を推したいと思います。

以上です。

○樋口委員　大学でマクロ経済学と国際経済学を教えている身におきましては、公民の教科書については特に関心がありまして、今、髙森委員長が話されました各分野、政治、社会に比べて経済学が軽いなという感じは、全ての教科書においていたします。特に紋切り型で、だから何かという部分が欠けている教科書も見受けられました。

中学生が新聞を読むという立場で、この教科書を使うと、今出ているニュースが理解できるのではないかという立場から考えたいと思います。

各章において、どういったテーマにおいて勉強するかという目的意識がはっきりし、それぞれにおいて学習した結果、これがポイントだということがわかりやすくなっている教科書がふさわしい教科書だろうと思います。1位はF者、2位はE者を推薦したいと思います。

以上です。

○和田教育長　来年夏の参議院議員選挙では、選挙権が18歳に引き下げられて投票が行われるという予定になっております。今回選ばれる教科書で学ぶ来年の中学3年生は、その3年後には選挙権を得られるということになります。そういうことを十分に意識しながら、今回、公民の教科書を選ぶ視点を持たなければいけないだろうと思っております。

公民の目標を端的に表現すると、現在の世の中の仕組みがどうなっているかということ。そして、一国民としての権利や義務をしっかりと理解した上で、よりよい社会形成の一端の担う力を養うことだろうと思っております。

先般、台東区では、教育大綱を策定いたしました。その中に、新たな地域や社会を創造するひとづくり、それから、自他を尊重し共に支え合う社会の形成を進めていく、とうたっておりますけれども、まさにその視点からも、公民の学習もしっかりとやっていただき

たいと思っているところでございます。

選ぶ観点といたしましては、まず全体の構成ですが、何より大事なのは、公民とは何なのかという説明だろうと思っております。それから現代社会への見方、考え方、それから学習方法、そして国際社会への見方、それから現在の社会的関心事などについての説明が、どのように行われているかということを視点に選ばせていただきました。

その結果、私は第1候補として、A者を挙げさせていただきたいと思います。

A者につきましては、全体の構成の中で、単元ごとに学習の整理と活用がきちんとされているということ。それと現代史の年表が、巻頭で詳細で非常にわかりやすいと思いました。

それから、肝心の公民とは何かについて、これは、各発行者ともかなりニュアンスが異なるということがわかりました。公民という抽象的な人格をいうという発行者もありますし、一方では、個人と社会との関係性を公民というという表現をしている発行者もあります。さらには、公民という言葉ではなくて、公民的学習という表現をしているところもあり、生徒たちにしてみると、一体公民という意味は、どういうことなのかということを理解するのが難しいなという気がしました。

そうした中でA者の場合には、巻頭の「公民を学ぶにあたって」という中で、公民というのは、個人が家族、学校、地域社会等に支えられ、そして国家の国際社会もその延長線上にあるというような説明をしておりまして、まさに個人と世の中全体との関わり、それが公民を学ぶ意味なんだということを示していると、はっきりと言っているのがいいと思いました。

そして、現代社会の見方につきましては、象徴的なのは、ルールを守る、決まりを守るというところにつきまして、公正効率の説明に具体的な事例を挙げて、考えを深めるヒントにしているということでございます。

社会事象の中で、自転車の放置自転車について、自分が置きやすいからここに置きましたという説明に対してどう答えますか、という具体的な対応を例示として挙げているところでございます。

それから、台東区は地方自治体でございます。特別区ですけれども、地方自治の在り方について非常にわかりやすい形での説明があったと思っております。

そして、国際社会の課題につきましては、国際社会の大切な原則の中に国旗と国家の尊重、これは国際ルールとしては絶対的なものだと。これをなくしては、自分の国の尊厳も、相手の国の尊厳も守れませんということで、強調しているところが非常によろしいと思っております。

あとは、現代的な課題で幾つか触れている部分がありますけれども、先ほども歴史のところで触れましたが、拉致問題、領土問題について、一通り見ました。

A者については、尖閣列島の問題について、はっきりと領土問題は存在していないという表示をしてございます。ともしますと、尖閣列島、それから北方領土も竹島も、同じよ

うな位置づけで捉えられている節もあるかと思いますが、尖閣列島については、まさに日本固有の領土というように示しているところに非常に特徴的なところが感じられました。

そして、最後に公民の結語として出ているのは、人間の安全保障が何よりも大事だと、そして国や文化の違いを越えた協力を求められるということで、こういった表示によって、私たちが一般社会で常識的に理解している、また将来の理想も含めた社会の在り方等について、非常に端的に述べているというところが、とても好感を持てました。そういう意味で、私はA者を第一位に選ばせていただいたわけでございます。

2番目は、私はB者を選びました。

B者につきましては、冒頭で、やはり学ぶ目的についてよく整理をされている。各項ごとに、「ここがポイント」として例示を挙げているということ。そして、決まりの問題など、議論が分かれるところにつきましては、むしろ「課題の探求」というところで、ディベートの実践例を挙げて、その方法を指南しているところがございます。

それから、「公民とは」という部分につきましても、「社会は国家というまとまりをもって初めて社会としての力を発揮します」という表現で、個人と国家との関わりについても、わかりやすく説明がされていると思います。

現代社会の見方につきましても、日本国民については、礼儀正しい国民性があること、そしてそれは、日本の社会が長く平和を培ってきたこと、そういうことの大きな一因にもなっているということで、説明をしております。

そして、家族と社会の在り方については、「家族の大切さは単純な損得では計算できません。互いの理解、愛情と協力によって豊かな家庭生活が維持されます」というように、家族の意味の大切さ、ともすると観念的な家族の関係性が強調されがちな中で、この具体的な考え方は、非常に重要だと思います。

そして、先ほど国旗・国歌で触れました国際社会での課題ですが、このB者は愛国心にも触れております。愛国心は国際貢献の土台です。要するに自分の国を愛する気持ちが、ほかの国も愛することになる、理解することになる。決して排他的なものではないという表現をしております。

そして、メディアリテラシーについても、B者は非常に端的な説明をしておりまして、世論誘導の可能性、あるいはメディア自身の価値基準で、新聞あるいは放送の内容が決められることがある。それに対して、そういうことがあるんだということを理解しながら、報道をしっかりみていく必要があるのではないかと述べています。

総じてB者につきましては、世の中に対しての見方について、非常に常識的な見方がありますし、今後、選挙権を得て、一社会人として地域を担っていくのに必要な要素は盛り込まれている教科書だと思いまして、私は2番目に挙げさせていただきました。

以上です。

○末廣委員　我々個人が生活する現実の生活の中で、全ての面にわたって関わってくるというのが公民の分野ということと、それから今、話が出ましたが、個人と公の社会との関

係です。これが非常に大きな意味を持っているということで、それは、例えば立場が違うと考え方も違ってくるという面がたくさんありますので、それをどういうふうに理解させていくかということが、公民の学習のポイントじゃないかと思っています。

そういう観点から、第1候補はF発行者、それから第2候補はE発行者です。

F発行者のいいところは、この日本の社会でいろいろと問題になっていることをどういうふうに考えていくか。

例えば、社会の福祉と個人の権利については今の日本社会で非常に大きな問題になっています。これを考えさせるといいますか、生徒たちに考えさせる、投げ方をしている。

例えば、プライバシーの権利と表現の自由。これも今の世の中では、必ずぶつかってくるものでありますけれども、我々はどういうふうに考えたらいいのか。こういういろんな項目が、20項目ほどありますけれども、そういう問題を生徒に投げかけている。

それから、例えば尊厳死をめぐる議論です。これは今の日本社会で賛成論と反対論に分かれています。両方の立場を明記した上で、我々は、どう考えるべきかという、そういうことが問題ごとに投げかけられている。

それから、現代の貿易の自由化と日本。TPP交渉も含めて、これをどういうふうに考えるか。あるいは、市長選挙があったとして、では誰を市長に選ぶべきか。それぞれの市長候補者が、それぞれの考えを言っている。それを全て調べた上で、我々も代表者を選ぼう、立候補しよう、そういうような、より積極的な姿勢で選挙というものを考えていく。そういうような投げかけが、F発行者にはあります。

そういうことで、生徒に今の日本や世界で起きている、いろいろな問題を生徒自身に考えさせるという、その考える材料はこうだ、こうだと出しているんですね。はっきり示しているというのがおもしろい。生徒に考えさせるという観点が強く出ていると思います。

また、日本の領土問題も、竹島と北方領土と尖閣諸島の話がはっきりと書いてあるということで、F発行者が私は第1候補です。

それからE発行者も、非常に似たようなところがありますけれども、やはり今、世の中で起きているいろいろな問題を自分たちの問題として考えましょうというのが結構あります。

例えば、マンションの騒音問題です。それを解決するためには、いろいろな立場の人がいろいろなことを言っている。それを聞いた上で、どう解決できるかですね。

それから、青果店を営む男性はどうなるというタイトルがありますが、これは八百屋さんをやっている店が、道路の拡張問題で動かなくてはいけない。そういうときには、どういうことを考えなくてはいけないのか。地方自治体は、どうあるべきかというような、いろいろと条件を出して、それで私たちはどう考えるかというような、そういう問題提起も結構あります。

またE者では、やはり現実の、世界で起きている今の問題。例えば中国の大気汚染がもたらす影響。つい最近、問題になりましたけれども、そういう汚染の影響、特に中国は広

いですから、そういうものを取り上げていく。

それから、自衛隊による国際協力などの問題が結構出ています。

それから、少子高齢社会における日本の財政。限られた財政の中で、どうこれから少子高齢化が、社会をちゃんと築いていけるのかという問題も、「未来に向けて」というコラムでは提示されております。

そういうことで、E発行者もF発行者に劣らず問題を提起し、生徒に考えさせるようにしておりますが、よりF発行者のほうが幅広く、そういう問題を扱っているということで、第1がF、第2がEということです。

以上です。

○垣内委員　ほかの委員の方々もおっしゃいましたけれども、私も公民を学ぶ目的というか、何をここで学んでもらおうかという姿勢に着目したいと思っております。基本的には、社会の仕組み、特にその背景になる地理や歴史、そういった科目をベースに、総合的に社会の仕組みを学んでいくということが、一番大きなイメージなのか、目的なのかと思いました。

そのためには、よりよい社会をどうつくるのかといった方法論といいますか、考え方。何が事実で、どういうふうにそれを認識し、そしてまた、どういうふうに解釈して、自分の実践に結びつけていくのかという姿勢、方法論を身につけるということとともに、そのために必要な基礎・基本の概念については、きちんと学ぶということが重要であろうと思います。

したがいまして、情報量も豊富である必要がありますし、わかりやすさも必要ですし、客観性と記述に関するバランス感といったことも重要であろうと思います。また一方で、国民主権、基本的人権、それから文民統制、シビリアンコントロールといった基本的な概念は、しっかりと押さえていただきたいというのが、私の公民を比較するときの視点になります。

各発行者ともにイントロダクションで、「なぜ公民を学ぶのか」、あるいは「学習を始めるにあたって」ということで、非常にはっきりとした目的意識が明示されているのと、それから使い方の説明などについても、非常に工夫されておりまして、その観点からは、あまり大きな差はないのかと思われます。ただ、丁寧さと情報量、それから必要な概念の説明に、少し差が出てきたかというところがございます。

私は、第1位として推したいのはD発行者です。

オーソドックスな内容と構成、それから学習課題の設定、振り返り学習などの工夫もありますし、まとめテストなどを使って、着実に基礎・基本を定着させるようになっていると拝見いたしました。

また必要な事項として、例えば文民統制です。これについてきちんとテキストの中で触れている教科書、必ずしも全発行者が触れているわけではないというところで、ちょっと驚きを感じましたけれども、そういった重要事項についても、本文中に説明があり、義務

教育で必要な、今の時点で必要な知識をきちんと身につけることができるという点、高く評価いたしました。

またD発行者の場合は、例えば「クリティカルシンキング」といったようなことも、コラムで設けていて、事実にどうやって自分なりに迫っていき、それを解釈し、それをまた生かしていくのかという方法論、単なる知識だけにとどまらず、そこまで視野に入れているというところを高く評価いたしまして、D発行者を第1位。

第2位といたしましてはA発行者です。

基本を押さえたオーソドックスな構成であって、各種の資料情報も非常に豊富です。学習課題の設定、復習テストによって着実に知識が定着するようなされていますし、必要な事項についても明記されているというところで、第2位をA発行者といたしました。

実は、F発行者も非常に魅力的で、特に丁寧で漏れがない情報というところは、非常に高く評価しましたけれども、先ほど言いました、私が今時点で、必ず義務教育で勉強してもらいたいという項目が、少し説明が不足しているという点が、非常に残念だったので、F発行者につきましては、この推薦の中には入れていないという状況であります。

以上です。

○髙森委員長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、集計した結果について、事務局お願いいたします。

〔集計〕

○髙森委員長　ただいまの集計結果につきまして、1位にA者を挙げられた方は1名、D者を挙げられた方が1名、F者を挙げられた方が3名。第2位にA者を挙げられた方が1名、B者を挙げられた方が1名、E者を挙げられた方が3名となっております。

結果として、1位にF者を挙げた方の数が3名と、最も多く過半数を超えております。

これにより、公民については、F者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか

○垣内委員　F者は先ほども申しましたように、非常にいい教材であろうと思いましたけれども、私が拝見する限りに見ては、文民統制についてきちんとした説明がないという点が非常に残念です。そのほかのところは、非常にオーソドックスで、わかりやすい構成にもなっていて、情報量も多いので、ここを教材として使うときに、少し補足されるなりしていただければと思います。

○樋口委員　経済学の分野については、ぜひ大学の入門経済学の教科書を読んでほしいです。今回見た教科書の中には大学の経済学の試験では合格点が取れるかどうか疑わしいような記述があって残念な部分もありました。

今回の全ての教科書に欠けているところは、一つは仕事の大切さについてです。今の大学生を見ていますと、私はどういう仕事をしていいかわからないという学生がたくさんいまして、現在就職活動中ですけれども、どこに行ったらいいかわからない。まさにこの公民の中でこの社会における仕事の大切さということをもっと強調して、し過ぎることはな

いと思いますので、単に産業や市場均衡価格を説明して終わりということではないのではないかと思います。

二つ目は、納税の義務やその必要性についての記述が欠けているかと思います。ある教科書では、納税は負担だというニュアンスを前面に出しているところがあり、残念だと思います。

この二つに関しては、生徒を教える場合に、ぜひ補足して教えていただきたい。中には中学で義務教育が終了して、就職する生徒もいるだろうし、進学も含めていずれは何らかの仕事をするわけで、この世における仕事の中で無駄なこと、いらない仕事はあり得ませんので、我々は、相互の仕事の大切さの中で社会が成り立っているというのを、ぜひ教えていただければと思います。

以上です。

○和田教育長　F者については、地方自治の部分で東京の特別区の説明をしています。特別区といいますと、行政区と自治区の違いがよくわからないまま一般的にも理解されている部分があるのかと思いますが、東京都の独自の制度でもありますので、学校の教員の方々も、この辺りはよく説明できるように準備してもらえればと思っているところでございます。

○髙森委員長　私のほうから1点。今回、推薦があがりませんでしたが、G者も良いところがありまして、それは経済の部分です。働くことの意義と役割、人は何のために働くかというところのすぐそばのコラムの中で、中小企業や町工場のことに触れているんですね。ほかの発行者も中小企業のことに少し触れているのもありますが。A発行者も同じく中小企業を扱うコラムが非常に充実していたと思います。

やはり日本の経済の底力となってきたのは、この中小企業や零細町工場でして、こういったところが日本経済を支えてきてくれていたという経緯もありますので、スポットを当てた授業など、先生方に工夫していただければなと思いました。感想でございます。

○樋口委員　一つ追加です。ある発行者において、ディベートの演題として救急車の利用度問題があります。それに関して、あなたはどう立場をとりますかという問いかけに、救急車を増やす、有料にする等々の政策選択が提示されていますが、こういう議論をするときに重要なのは前提条件でして、救急車の公的提供をどう捉えるかということについて、生徒に前提条件をかけないと、単に救急車という話とタクシー利用とを一緒にするならば、恩恵を受ける人が料金を支払うべきという話になり、料金の払えない人は救急車に乗ってはいけない、利用しちゃいけないという議論になってしまうわけです。救急車とはそもそも何か、経済学でいうと公共財ですね。こういった議論するときには、必ず前提条件を共有化しなくては、好き勝手な議論をする一方で、好き勝手な結論を出してしまうことになり、ディベートの在り方としてはよくないです。ディベートするという場合に、教員はしっかり前提条件を共有化した上で、結論を出していくということが重要であろうと思います。以上です。

○高森委員長　B者の、特に国防教育の部分について、ここでは非常に課題があるというところがたびたび出てくるのですが、例えば161ページの欄外の記述に気になることがありまして、「国の平和と安全のためには自国の軍事力の整備が必要である」と書いてあるんです。まるで軍事力の整備以外に国家の安全と平和を守ることができないような印象を受けます。短絡的に結びつけられているのが違和感を感じました。欄外ですけれども。軍事力の整備以外の方法も提示してほしいなとも思いました。

ほかいかがでしょうか。

（なし）

○高森委員長　それでは、公民につきましては、F者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○高森委員長　ご異議ございませんので、公民についてはF者に仮決定いたしました。

それでは、F者の発行者名について、事務局お願いします。

〔発行者名公表〕

○高森委員長　それでは、仮決定した発行者名について公表いたします。発行者は、東京書籍でございます。これにより、公民につきましては東京書籍に仮決定いたしました。

地図

○高森委員長　次に、地図についてご審議願います。

発行者は2者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

樋口委員から順にお願いします。

○樋口委員　2者の比較をしまして、社会の勉強、地理、歴史、公民の勉強においての資料として地図があったと思います。

結論を言いますと、私はB発行者を推薦します。

大きな理由は、よく日本の世界における役割というところで、ODAの問題があるかと思いますが、日本は一貫して世界に対して多額のODAを実現してきましたが、これを真っ先に出しております。それによって、世界における日本の役割の重要性を、この地図帳を使う生徒に理解させるものだと思います。その一方で、地図の使い方についてもわかりやすく解説されています。

もう一方のA発行者は、実は私がすでに当地で、道路の経済効果調査を行ったところなんですが、中国の海南島の高速道路について、地図帳の記載に疑問があります。この地図上では道路を海に出して記載しているのですが、そんなことはありません。25ページと22ページとでは、矛盾があります。これは地図帳としてはいかがかとも思いました。

もう一つは、世界の食のところで使われている写真が、非常に古いという一面があります。これは16ページの草でつくられた家、ペルー及びその下に中華人民共和国の食事風景、

大韓民国の食事風景、このあたりはあまりにも古過ぎるのではないかと思います。

以上です。

○和田教育長　私も地図につきましては、B発行者を推したいと思います。

A発行者に比べますと、図表などの数では若干少ないようですが、一方で非常に図表も精選されているということと、地図の表示が非常に見やすい表示になっていると思われます。文字も配置などが見やすくなっていて、地図のベースと文字のコントラストがはっきりしているという意味では、わかりやすく見やすい地図になっていると思います。また、京都の中心部などの表示についても、寺社仏閣の配置など、まさに修学旅行などでそのまま使えるような表示が出ているということ。

それと関東の在留外国人の推移、あるいは国際化などの件についても図示されているということ。

さらには、いろいろな産業関係のデータについても、非常にわかりやすい図表を使っていますので、日本の国の全体、それから国際的な位置、特性についても、学習するには一人でも十分楽しめる地図になっているというふうに思います。

よってB発行者でお願いしたいと思います。

○末廣委員　それぞれ特色があり、非常に甲乙つけがたい感じはします。

確かに、資料図やグラフ、写真や図、いろいろとありますけれども、B発行者のほうが確かに見やすいですね。ただ、私は資料数が多いほうをとりました。やはり、いろいろな資料があって、結論としてはA者が第1で、B者が2位です。

いわゆる、A者の統計図や資料図の数が、いろいろと出ているということで、その数の多さでA者としました。

以上です。

○垣内委員　それぞれ特色がありまして、やはりB者はビジュアルがすぐれていて見やすい気がいたします。ただ、情報量は、やや少ないかなと。

A者は資料が多くて、情報量が非常に多いということと、鳥瞰図が立体的でわかりやすい。また、台東区に関しては、江戸から現代までの変化がわかるように工夫されているという点もあります。

教材として、地図の教材に何を求めるかということなんですけれども、私は見やすさよりも情報量ということで、A者が第1位、B者が第2位と推薦したいと思います。

○髙森委員長　優劣をつけがたいところがあるのですが、まず私は、凡例がしっかりしているかどうか。それから、世界全体の地図の表現の仕方ですね。各種の地図の表現の仕方が見やすいかどうかという部分です。それから、各種資料の充実度はどうであるか。そのほか資料編として取り上げられているものが、どういった特色があるか、そういったところを中心に比較をいたしました。

凡例については、B者は非常に緻密で、これだけそろっていれば問題ないという感じでしたけれども、B者とA者を比較したときに大きな違いは、B者は比較的最新の技術をいろ

いろと取り入れている点が挙げられます。特にCG、コンピュータグラフィックスを活用して地図を表記したり、鳥瞰図もCGで海底の起伏まで読み取れるという、若い世代にとっては、これは興味を引きやすいような表現の仕方だと思います。

ただし授業の中で取り扱うときに、あまりイメージ、ビジュアルに力を入れているCGの表記だと、正確なところが読み取れない部分もあるのではないかと思います。特に陸の高さですね。A者は等高線で色分けをして表記しています。リアリティには少し欠けますけれども、大まかな標高は正確に読み取りやすいというところがあるかと思います。一方のB者はCG中心ですので、陸高は色分けなどで表現されています。リアリティもありますけれど、正確に読み取りにくいかなとも思います。生徒たちが授業を受けるときにどちらの方を優先すべきなのかということを考えました。

それとあと、A者の資料編ですが、日本は災害大国ですので、災害を取り上げた紙面というのは、A者のほうが非常にすぐれています。B者よりも充実している。

ただB者は、ほかの部分で、例えば巻末の折り込みに日本の領土が詳細に説明されて、写真で解説されていたり、日本の工業の紹介ページ、それから第一次、第二次産業の地図が非常に整理されて情報量も多いかなと思います。それとB者のおもしろい特徴は、世界のCO_2排出量の図があったり、これは環境問題にかかわりますね。それからカロリー摂取量、これはおもしろいかなと思いました。食糧問題と関連するという、現在の世界が抱えている環境問題、食糧問題をこういった切り口から取り上げているのもおもしろいかなという気はいたしました。とはいえ、生徒たちが使うときに、ビジュアル重視の資料を選ぶほうがいいのか、それとも、先ほど言った読み取りやすい従来のスタイルの地図帳がいいのか。やはり中学生ですから、はっきりと資料が読み取れる、地図が読み取れる方がいいかなという気はいたしました。

そういった意味で私は、A者を第1位に、B者を第2位に選びたいと思います。

特にA者は、デジタル教科書が学習者用と指導者用の両方が用意されているということが、B者と異なるかという気はいたします。

以上です。

それでは、ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言をいただきましたが、結果について、事務局お願いいたします。

〔集計〕

○髙森委員長　ただいまの集計結果につきまして、1位にA者を挙げられた方が3名、B者を挙げられた方が2名。2位にB者を挙げられた方が3名となっております。

結果として、1位にA者を挙げられた方の数が3名と、最も多く過半数を超えております。

このことにより、地図については、A者に仮決定させていただきたいと思いますが、これについての付帯意見がありましたらば、お願いいたします。

○樋口委員　具体的な発言をさせていただきますが、A者の25ページですが、海南島の三亜、海口の高速道路ですけれども、海に出てしまっているのですね。その一方で23ページ

と33ページは内陸になっています。この道路の経済調査を実施した私としては、これはちょっと容認しがたい地図帳でありまして、間違いなく内陸部で片側3車線、合計6車線の高速道路でありまして、ぜひともこれは修正をしていただきたいと思います。

○高森委員長　地図を何に基づいてつくっているかはわからないですけれども、印刷上のミスなのかどうか、いずれにしても間違いということであれば、発行者に対して教育委員会からこういった意見が出ましたということで、挙げていただくということはできるのでしょうか。

○指導課長　修正が反映されるかどうか、今の段階で私から判断はできませんが、こういうご指摘いただいたということは、発行者にお伝えをしたいと思います。

○高森委員長　できれば正誤表でもつくっていただいて、採用されたとなれば、全校に配布する必要があるかなという気もします。

ほかにご意見ございませんでしょうか。

（なし）

○高森委員長　それでは、地図につきましては、A者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○高森委員長　ご異議ございませんので、地図についてはA者に仮決定いたしました。

それでは、A者の発行者名について、事務局お願いいたします。

〔発行者名公表〕

○高森委員長　それでは、仮決定した発行者名について公表いたします。発行者は、帝国書院でございます。これにより、地図につきましては帝国書院に仮決定いたしました。

数学

○高森委員長　次に、数学についてご審議願います。

発行者は7者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

和田教育長、お願いします。

○和田教育長　数学について、申し述べさせていただきます。

本区の中学校における数学については、どちらかというと若干伸び悩んでいる状態でございます。従いまして、基礎をしっかりと習得する必要があり、それが本区の中学校数学授業の課題であると思っております。

中学校の数学につきましては、理想を言えば、授業の各単元ごとに小学校で学習した基本事項を復習できるような構成になっていると望ましい。小学校だけではなくて、2年生の場合には1年生、3年生の場合には2年生、いずれにしても関連する事項を随時確認できるような書式が必要なのではないかと思っているところでございます。

ただ、そのような配慮がされていても、現実的には大変時間が限られているわけで、効

率よくおさらいをしながら、生徒を指導できる教科書が必要でございます。またさらには、習熟度別に対する配慮も必要となっておりまして、少人数指導にも活用できることが条件となるかと考えております。

中学1年生につきましては、小学校の算数から数学に、いわゆるフィールドが変わるわけでありまして、それを十分認識できること、戸惑わないで進むこと。

また、中学3年生につきましては、高校受験を意識した学力の質の向上がさらに強く望まれる学年でございます。さらに中学3年生は、高校進学後も、さらに高度な数学に対応できるような基礎を存分に養っておく必要がございますので、そのようなことにも配慮した、硬軟取り合わせた内容が望まれるだろうと思っているところでございます。そのような意味では、各単元での理解を確かなものにするために、反復練習をしっかりとできるものを期待しております。

全体の印象などをまず申してみますと、大変字が細かい発行者もございますし、印刷がやや薄目というところもございます。

一方で、各章ごとに小学校の確認問題があるだけではなくて、各章にあらかじめ前で学習した関連事項をもう一度問題集、あるいは説明のような形で置いてあるところもございます。そのような点は、非常に生徒たちにとっては望ましい形であろうと思っております。

結論から申し上げますと、私は第1位にはD者を推したいと思っております。

D者につきましては、ノートの使い方、単位の書き方等を冒頭にまとめておりまして、さらに学年ごとに数学で使われる考え方、これについては、類推的なものですとか、帰納的なもの、演繹的な考え方などありますけれども、そういったものを学年ごとに例示を挙げて、パターンで使い分けをアドバイスをしております。そのような意味で、縦横無尽な幅広い考え方を促すという意味では、非常にいい試みをやっていると思います。

さらに巻末の課題学習等につきましても、現代数学を超えた小町算や魔法陣、あるいはピタゴラス音階なども取り上げておりまして、余力のある子供たちにも興味深い内容となっていると思います。

続いて２番目には、C者を推したいと思います。

C者については、珍しいですが「社会にリンク」という欄が随所にあります。実際の気象予報士や文学者、あるいは大工さんなどが、数学と自分の仕事との関連を説明しているところがありまして、数学の活用が社会のいろいろなところに、多岐にわたっている。子供たちにとっても、また新たな興味を喚起することにおいても、とてもいい試みになっていると思います。

また、C者のいいところは、小学校の復習問題も含めて、大変各章とも問題が盛りだくさんに入っております。生徒にとっては厳しい面があるかもしれませんが、少なくとも教科書の中でこれだけ問題を確保できているというのも、非常にいい形だろうと思っているところでございます。

私はD者を1番、C者を2番とさせていただきます。

以上です。

○末廣委員　数学というのは、好きな子と嫌いな子の差が非常に大きくなってしまう教科です。振り返りといいますか、復習といいますか、前に一度戻って、それから先に進むという、そのやり方が非常に大事ではないかと思います。そして基礎的な問題、それから、より難しい問題に入っていくという、そのようなステップが大事です。そのような構成をしている教科書がいいのではないかと思います。

結論からいいますと、D者が第1位で、E者が第2位と考えました。

D者の数学の進め方は、1年のときには、小学校で学習したことを確認する。2年生になると、中学校1年生で学習したことと、2年生で学習していることとの関連について、その都度学習する。それから、例題があるのですが、この問題に対してどう考えるべきか考え方を提示して、そして回答するのです。非常に丁寧なやり方をしています。

また、章ごとにまとめの問題があって、「クローズアップ」というコーナーでは、資料を活用している。さらなる数学へステップ、ステップ、と進んでいくという。そして基本的な課題学習、あるいは自由研究、そのようなやり方がとられているということで、確実に理解できて学力を上げていけるのではないかという気がします。

第2位に推したE者も、基本的には同じような考えだと思います。「数学マイノート」では考える力を伸ばす、そのようなコラムがあります。それから、1年生のときは算数の振り返り、これは巻末問題でやっていますが、補充の問題で基礎を固め、活用問題で学びを生かす、そのようなレベル分けの問題があります。

全体的にはD者が1位で、E者が2位ということです。

以上です。

○垣内委員　ほかの先生方もおっしゃいましたけれども、数学に関しては、計算することだけではなく、考える、ロジカルシンキングの能力を養うということも非常に重要なことだろうと考えております。この観点から、比較、検討をいたしました。

各者、必要事項は十分に押さえられていて、構成、その他については、あまり大きな差はないように思いました。また、それぞれ「マスナビブック」がついていたり、「マイノート」があったり、また資料として「伝統工芸」や「3D」、「社会とのリンク」や「スポーツなどに触れる」といったような、関心を引くためのさまざまな工夫がなされているのですが、その中でも、特に第1位としてはD者を挙げたいと思います。

理由は、導入部分が非常に丁寧で、小学校との接続ということを非常に意識していて、いわゆる中1プログラムを避けるということをきちんと踏まえた上で、オーソドックスな構成となっているというところを評価します。

それからノートのとり方、学習の進め方などもきちんと説明されていると同時に、多様な問題をまとめとして掲載するなど、学習した知識を定着させる工夫があるように思いました。

確認部分が単元途中で入っていて、基礎・基本をきちんと身につけるという観点から、

とてもふさわしい教科書だと思います。また、「カードゲーム」や「クローズアップ」など、さまざまな小さな工夫もされています。

また、基本・応用・活用ということで、ある種、学力のレベルに合わせて教材として使えるという部分も評価したいと思います。

したがって、第1位がD者です。

第2位はC者を挙げたいと思います。

C者もD者も内容的にはオーソドックスですし、学習の進め方、ノートのとり方なども示していて、どちらも優れている教科書ですが、特にC者の場合は、「マスフル」という最後についている資料が非常に楽しくて、数学に対して生徒の興味・関心を喚起できるのではないかと思います。単に数字を扱うということではなくて、応用編をさまざまな角度から扱っている部分で、一歩リードかなと思いましたので、第2位はC者になります。

実は、C者とD者どちらにしようか悩みましたが、本区の場合は、数学の基礎・基本の部分が非常に重要だと思いましたので、第1位はD者、第2位はC者ということにいたします。

○髙森委員長　例によってこの教科を学ぶ意義、数学を学ぶ意義がしっかり定義づけられているかどうか。物事を筋道立てて考える、論理的思考の大切さが示されているかどうか。身の回りの問題解決にも数学的思考が役立っているかどうか。先ほど「マスフル」も指摘されましたけれども、そういったことが意義として、しっかりと盛り込まれているかどうか、というのが最初の視点です。

それから学習の方法論については、学習の進め方、ノートのつくり方、レポートの書き方、数学的な思考、単位の表記、ルールなど、しっかりと明記されているかどうか。それから、日常的な営みの中で数学がどのように取り入れられているかという部分が、導入としてどう位置づけられているか、これをもう一つの視点として見ました。

それから、小問題やまとめがしっかりとできているかどうか。全体的な総まとめがあるかどうか。そして、補充学習、発展学習がしっかりと用意されているかどうか。その他ICT活用の部分やデジタル教科書の有無など、そのような視点で比較いたしまして、私はD者を1位、E者を2位に選びました。

D者は特に学習の方法論というところで、特に数学的思考について、先ほど和田教育長からも指摘がありましたが、類推・帰納・演繹型の三つの視点の紹介がある。それから導入の部分については、1年生の教科書には、小学校での既習事項を確認するという形の導入をしている。これはなかなかおもしろい位置づけかなと思っています。他者にはこのような例がなかったですね。日常的な営みは取り入れられているものがあっても。これは一つ特徴的かなと思います。

それから、小問題やまとめの部分は、特にD者は、章末問題が基本・応用・発展の3ステップで出題されていて、学力の低い生徒の基礎学力定着にも効果が期待できるのではないかというところでございます。

また、ICT活用のコンテンツがコンピューターのアイコンで示されているのは、これは

各者共通ですが、デジタル教科書が指導者用、学習者用の両方が用意されているという、これが一つ大きなポイントではないかと思います。

あとは発展学習の部分で、レポートや発表、調査の手引きや課題学習、自由研究のテーマなども紹介されていて、生徒たちがこれをもとにして課題学習や自由研究に取り組めるような、そのような構成になっているかと思います。

それから、2番目に推したE者ですが、E者につきましては、特色的なところとして総まとめが充実しています。巻末に「もっと数学しよう」の「学びをつなげる」の冒頭で、前の学年までの既習事項のまとめがここでなされております。特に3年生は、1、2年生の学習事項との関連性がしっかりと示されているなという印象で、生徒たちもこれを見るだけで、中学校で何を学んだのかわかるような便利な総まとめがついています。

それから補充発展学習も、巻末の課題編には、末廣先生からも指摘がありましたが、「社会とつながる」「数学をひろげる」「教科とつながる」「数学の歴史」の4本立てで、これも整理されていて非常に好感が持てます。それからデジタル教科書も、こちらも指導者用、学習者用の両方が用意されています。

2者比較したときに、D者のほうは総まとめがないのは残念ですが、ほかは非常に秀逸だということで、私はD者を1位に、E者を2位に推したいと思います。

以上です。

○樋口委員　先ほど教育長も言われましたように、本区の中学生の数学の学力の問題をまず優先して考えました。垣内委員も言われましたロジカルシンキングが大事で、一定の約束のもとにロジックを組み立てて、解答を導き出すというのがロジカルシンキングの重要なポイントだろうと思います。

その二点を考慮して、テキストを選ぶならば、やはりD者が一番わかりやすいと思います。その次にE者を挙げたいと思います。

この二つが特に秀でているわけではないのですが、本区の学力状況を考えれば、現場でもこのテキストを推薦しておりますし、私もそれぞれのテキストを、特に練習問題、振り返り等のところを見てみましたが、この2者のテキストはわかりやすいと思いました。ある一定の実力のついた生徒においては、練習問題で補足ができますので、D者とE者については、実力のある生徒にも対応することができますので、この2者を推薦したいと思います。1位はD者、2位はE者ということでお願いします。

○髙森委員長　ただいま各委員から推薦する発行者についてお話をいただきましたが、集計結果について事務局、お願いいたします。

〔集計〕

○髙森委員長　ただいまの集計結果につきまして、1位にD者を挙げられた方が5名、満票です。2位にC者を挙げられた方が2名、E者を挙げられた方が3名となっております。

結果として、1位にD者を挙げた方の数が5名と、満票となっておりますので、このことにより、数学については、D者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことにつ

いて付帯意見等ございますでしょうか。特にございませんか。

（なし）

○髙森委員長　それでは、数学については、D者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○髙森委員長　ご異議ございませんので、数学についてはD者に仮決定いたしました。

それでは、D者の発行者名について、事務局お願いいたします。

〔発行者名公表〕

○髙森委員長　それでは、仮決定した発行者名について公表いたします。発行者は、学校図書でございます。これにより、数学につきましては学校図書に仮決定をいたしました。

理科

○髙森委員長　続いて、理科についてご審議願います。

発行者は5者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

末廣委員からお願いします。

○末廣委員　台東区におきましては、中学生になると理科が苦手という生徒が増える傾向があります。その理由について考えましたが、理科はおもしろいものだ、そのように思えるような授業をすればいいのではないかと思っています。実験をあまりやらないという話を聞きますが、なるべく生徒が興味を持てる実験をどんどんやってほしいと思います。

まず。理科が楽しいものだと、それをアピールしている教科書を評価したいですね。それから、実験を行う場合には、器具の扱い方、あるいは薬品の扱い方、その安全性、そういったことを、どの教科書もある程度は当然述べているわけですが、しっかりと述べているもの。また、理科室の使い方、決まりなど、そのようなことをしっかりと教えているものという観点から、第1位はD者、第2位がB者です。

基本的には、大きな差があるわけではないですが、D者は全体的に見ますと、写真や絵、図やイラストが非常に豊富ですね。「from JAPAN ニッポンの科学」というコラムがあり、興味を引きそうなものが沢山あります。

それから、1、2年生ですと、郊外にある理科系のいろいろな施設を活用するというところもあります。3年生になりますと、「不思議大陸」「歴史大陸」「すごい大陸」「エコ大陸」といったコラムも、生徒の興味を引くものが多いということで、D者が1位です。

B者は、D者と差があるわけではないですが、B者のいいところは、実験です。観察や実験、その数が比較的多いということです。その実験の結果をきちんと整理し明示している。その点は非常にいいところだと思います。

以上です。

○垣内委員　理科に関しては、基本的に実験や観察を通じて科学的に考えて結果を出して

いくという、課題設定及びその結果の考察というところが、連続してきちんと学べるということが、非常に重要な目標であろうと思っております。またあわせて、実証的な面もありますので、安全や決まりといったようなこともきちんと身につくということも重要であろうと思いまして、この2点から比較をさせていただきました。

各者が非常に工夫をされていまして、導入部分についてもわかりやすいですし、使い方の説明も十分あるし、キャラクターなどによってわかりやすい紹介や、振り返り、まとめなどの方向性は、それぞれ工夫をされていると思いました。

その中で、第1位としてはD者を挙げたいと思います。

問題解決に向けて、教科書の使い方、勉強の仕方ということを非常に丁寧に説明しており、わかりやすいと思いました。またレポートやノートの書き方、記録のとり方に加えて、応急措置まできちんと説明されているというところも評価しました。

一番重要な点は、結果に至るプロセスを考えさせる工夫ということが、キャラクターや吹き出しなどを使って多くなされているように思いました。また、ページつきのキーワードなども評価できます。そのようないろいろな工夫を施して、考え方を身につけさせる構造になっていると思います。

また、ほかの教科書では、例えば物質の状況や力の説明といったようなところから入ることもあるのですが、やはり身近な植物の観察から入っていくほうが、わかりやすいのかなと思いましたので、第1位はD者です。

第2位はB者です。

復習事項や振り返り、学習事項の概要、単元のまとめといったようなことで、着実に学習効果を狙う工夫がなされているということと、コラムのわかりやすさということで、B者を第2位と考えております。

以上です。

○髙森委員長　私はまず、理科を学ぶ意義がしっかりと定義づけられているかどうかというところを期待しましたが、ほとんどがありませんでした。C者だけが唯一、1年生の1ページ目に、「なぜ理科を学ぶのか」という小さな10行程度のコラムがありました。

そのほか、科学と理科に関して重要視しなければいけないのは方法論ではないかと思います。観察や実験の進め方、目標をつくり、計画を立て、観察・実験をし、結果を出して考察をして、まとめて発表をするという、そのような流れが、きちんと方法論として位置づけられているかどうかといった点も重要ではないかと思いました。

それから、具体的な器具の使用法については、安全面の配慮も含めてなされているかどうか。理科ですので、ICTデジタル教材に力を入れているかどうか。まとめ、発展学習についてはどのようになっているか等々、そのほかの視点もありますけれども、そのあたりを中心に比較検討いたしました。

結果、私はD者を1位、C者を2位にいたしたいと思います。

まずD者ですが、方法論の部分で、実験ノートの書き方、話し合い、発表、記録、情報

収集のテクニックも非常に詳述されている。それから、1年生の冒頭と2年生の巻末に、理科室の決まりというものが、まとめて紹介されているのが非常に評価できると思います。

それから、器具の使用法の部分では、巻末資料に薬品の取り扱い方をはじめとして、実験器具の一覧、主な器具の基本操作がまとめられています。これはあちらこちらに分散して載っていると、その都度探すのが大変ではないかと思うのですが、巻末にまとめられているということで、何かあればすぐ巻末にたどればいいという、そのような利点があると思います。そのような意味ではD者は非常に秀逸です。

また、まとめと発展学習の部分では、D者に関しては、学習内容の整理というものがあって、該当ページが併記されていて非常に便利です。応用問題、自由研究についても、各単元ごとに設けられていますので、生徒たちはこれをもとにして自分の発展学習に活用できるのではないかと思います。

その他の部分では、先ほど末廣委員からも指摘がありましたが、各単元末の「from JAPAN ニッポンの科学」というのは非常に特色的かと思います。世界に誇る日本の科学技術について紹介されている部分です。それから、デジタル教科書は、このD者に関しては指導者用、学習者用の両方が用意されているというのも魅力です。

また、実験・観察に関して、他の発行者は結果ありきの構成で行われていますけれども、D者は考察しようという問題解決型重視、先ほど垣内委員からも指摘がありましたが、考察しようという過程を非常に重視しているというのは、非常にいい部分ではないかと思います。

２番目に選んだC者ですけれども、方法論としては1年生の冒頭で、6ページにもわたって「理科学習の進め方」というところが詳述されています。また、特徴的にはD者とあまり変わらないところがありますが、まとめ・発展学習の部分では、各単元ごとに重点と重要語句の整理、基礎基本問題、あるいは、その重点とその重要用語についても、よく整理されています。

それから、巻末には「自由研究」というものがありますが、ここには方法論も含めて解説があるのは、他の発行者にはない特色かなと思いました。

そのようなことで、私はD者を1位、C者を2位に推したいと思います。

以上です。

○樋口委員　違う見方を私は提案したいと思います。

まず、教科書調査委員会からの報告の中に、デジタル教科書については既に配布をされていて、経費上の問題があるという報告を受けております。では、この5者の教科書を見る場合に、他の分野以上に何か大きな差はないのではないか。そうであるならば、やはり現場の先生の使い勝手が優先されるべきではないかと思います。特に理科の学力の問題について考えた場合、やはり先生の使い勝手のいい教科書を選ぶべきだと、私は考えました。

したがって、この教科こそ、教科書の調査委員会報告に従って私は選択をしました。1位がA者、2位がB者であります。

以上です。

○和田教育長　理科につきましても、本区では全学年とも若干苦しい状態かなと思っております。そのような意味では、理科嫌いが依然として多い状況と思われます。その理由としては、なかなか身近で素朴な関心や興味を、教科書や授業でしっかりと受け止められていない面があるのかもしれないと思っておりまして、いわゆる身の回りのことでの不思議というものに対して、教科書が何らかの回答あるいはヒントを与えてくれるものがいいなと思っておりました。

また、未知のものを発見するとか、あるいは自然の力を知る。そしてその延長線上に、つくる喜びや達成感などを得るきっかけになればいいと思っております。

台東区の場合には、自然体験を得るという意味では大変限られた環境でございます。また、教科書だけでそれらを補うことには限界があるわけでございますけれども、写真や図解、実験など、それらを大変多く提供してくれることが必要だと思っております。

現代の日本は、いろいろものを創造する、ものづくりに対しての関心が徐々に減退していると言われておりますが、理科はその基本になる部分を学ぶということで大変重要性が高まっております。ぜひとも、今後学力向上のきっかけにしていきたいという思いでございます。

私は、今回この理科につきましては、B者を推したいと思います。

第1位はB者ですが、それは実験数が最多であるということでございます。これは教科書の中にもそのまま書いてありますが、「学習指導要領には示されていない内容です」という注釈つきで、海に生息する微小生物ですとか、生物のDNAを取り出す方法など、普通の授業ではやらないようなことも、子供たちに知らせようとしているという姿勢が非常に好感が持てます。もちろん、授業の中でこれをやることは恐らく不可能に近いだろうとは思いますけれども、子供たちはこれを読むことによって、「へえそうなのか」というところを知ることが、科学的関心の第一歩なのだろうと思っているところでございます。

そしてまたB者の場合には、こうした学習内容が世の中ではどのようにして活用されているかということについて、「プロフェッショナル」というコラムで紹介をしておりまして、いろいろな職業の人たちがどのようにして科学での学習を活用しているか、そういうことを紹介しております。この中で異色だったのは、介護士も活用しているというようなところがあって、子供によっては目からうろこの部分もあるのではないかなと思います。

そして、各章のまとめが非常にわかりやすいということと、IPS細胞のことについても、コンテンポラリーな話ではありますけれども、とても上手に取り上げてくれているのがうれしいなと思いました。

２番目に推しますのは、D者でございます。

D者は、自然になかなか触れることができないという環境の中で、写真を大変きれいに撮っておりまして、特に生物、植物の写真が豊富に掲出されているということに、とてもいいと感じました。

また、3年生の巻頭では天体の写真がありますが、思わず釘づけになってしまうような写真で、子供たちの興味・関心を喚起するには非常にいい効果をもたらしていると思います。

先ほどお話にもありましたが、「from JAPAN ニッポンの科学」の囲み記事、コラム、これも私も同様にいい試みだと思いました。

以上です。

○髙森委員長　ただいま各委員から、推薦する発行者についてご発言いただきましたが、集計結果、事務局お願いいたします。

〔集計〕

○髙森委員長　ただいまの集計結果につきましては、1位にA者を挙げられた方1名、B者を挙げられた方1名、D者を挙げられた方3名。2位にB者を挙げられた方3名、C者を挙げられた方1名、D者を挙げられた方1名となっております。

結果として、1位にD者を挙げられた方の数が3名と、最も多く過半数を超えております。

このことにより、理科については、D者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

○樋口委員　お聞きしたいことがありますが、基本的に理科の授業は、週何回ですか。

○指導課長　週3回です。

○樋口委員　ぜひとも工夫していただきたいですが、D者の教科書ですけれども、観察・実験数が3年間で162ということですが、そうすると11カ月授業をやるとして、80回から90回ほどの授業の中で、162の観察・実験をやることになるわけですが、生徒に理解させる部分を工夫しないと、ただ実験を繰り返すだけで終わってしまいます。

このことには大きな問題が二つあって、一つ目は、生徒が実験結果をどう集計し、どうまとめていくかという話と、二つ目は、教員が実験の準備をするのにどれだけの工夫をするかということです。実験は教室に行けばできるというものではなくて、あらかじめ準備をし、相当の工夫を要すると思いますので、場合によっては教科書に書いてある内容をはしょるのも工夫の一つではないかと思います。特に3年生で54というのは、若干多いかなという感じがしますので、この辺は工夫の余地はあるだろうと思います。

以上です。

○指導課長　理科の授業では、課題解決型の授業の充実を図るということも大きな狙いの一つですので、単に実験をこなすということではなく、実験の目的を明確にして、授業の狙いが達成できるよう指導を進めていきたいと考えております。

○髙森委員長　B者の教科書にはいい部分が幾つかあって、先ほど和田教育長もおっしゃったように、IPS細胞や核エネルギーなどの学習指導要領で示されていない事項がコラムで紹介されていると思いますけれども、特色的なところとしては、科学館、博物館の紹介ページが全学年にあるというのがB者の特徴だと思います。台東区はご存じのとおり上野に行けば科学館・博物館は充実していますので、他者が今回選ばれましたけれども、先生

方には参考にしていただいて、ぜひうまく活用できないかなという気がいたしました。

ほかいかがでしょうか。

（なし）

○髙森委員長　それでは、理科については、D者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○髙森委員長　ご異議ございませんので、理科についてはD者に仮決定いたしました。

それでは、D者の発行者名についてお願いいたします。

〔発行者名公表〕

○髙森委員長　それでは、仮決定した発行者名について公表いたします。発行者は、東京書籍でございます。これにより、理科につきましては東京書籍に仮決定いたしました。

音楽（一般）

○髙森委員長　続きまして、音楽の一般についてご審議を願います。

発行者は2者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

垣内委員、お願いします。

○垣内委員　音楽に関しては、基本的には基礎知識も身につけていただきたいと思いますけれども、芸術という人間の根源的な活動の非常に基礎となる部分ですので、やはり関心を掘り起こし、かつそれを楽しむすべというのを身につけていただきたいと思っています。

この観点から2者拝見いたしましたけれども、いずれもバランスよく歌唱、鑑賞そして創作といったことを取り上げておりますし、日本と世界の音楽の紹介もほぼ同様で、民謡などにも目配りをして、非常によくできた教科書ではないかと思います。ただ、少しだけ差がありまして、私は第1位はA者にしたいと思います。

どちらも非常によくできていますが、A者の場合は歌唱、鑑賞、創作を関連づけながら学習を進める工夫がありまして、ビジュアル的にも教材としてわかりやすいのではないかと思いました。それから、年表などもついていて、音楽の歩みといいますか、どのように進化してきたのかといったようなことも紹介されていて、いろいろな使い方ができるのではないだろうかと思いました。

また、「音ってなあに？」ということで、発展問題もありますので、基礎・基本だけではなくて、少し進んだ方々にもそういった選択もできるのかなと思いました。一つの楽曲の中で、さまざまな音楽の要素を切り口に鑑賞するような教材もあるということで、聞き方も少し構造的に学べるという点で、第1位をA者。

第2位がB者です。

B者は非常にわかりやすく、またバランスもとれていて、「音楽の約束」といった情報も網羅されているという点で、評価もできるかなと思いました。

以上です。

○髙森委員長　私は、まず音楽を学ぶ意義というものが示されているかどうかですけれども、ほかの教科と違って、そのあたりを詳しく説明している教科書はありませんでした。A者が比較的、冒頭の見返しの口絵にバイオリン、三味線の奏者、芝居の演出家らのインタビューを掲載して、それぞれ音楽に対する思いを紹介している点が、少し特徴が出ているかなと思いました。

また、音楽の分析の部分、指揮法、楽譜記号の解説、コラム、それぞれの分野でどのようになっているかを比較した結果、私はA者を1位、B者を2位に推したいと思います。

A者は音楽の分析の部分で、音色、旋律など八つのカテゴリーで音楽を分析した「どんな特徴があるかな？」というのが、全学年に共通のものが掲載されています。それから、2年生、3年生の上下には、「音の3要素」といった科学的な分析もあったのが非常に興味を引きます。更に、指揮法も1年生では本編で解説、また楽典として各学年の巻末にも掲載されています。

楽譜の記号についても、楽典として各学年の巻末にまとめられていて、非常に充実していると思いました。

コラムはいろいろありますが、追い込み、見返し、口絵が比較的充実していおり、世界の音楽史年表、オーケストラの楽器や和楽器などの楽器の紹介、雅楽、歌舞伎などの伝統芸能の紹介などが比較的充実しているかなというところでございます。

したがいまして、私はA者を1位に推して、B者を2位としたいと思います。

○樋口委員　私は甲乙つけがたいと思いましたが、教科書を見て、どのような楽曲を取り上げているかを見ました。また、音楽の学習の確認のところ、いわゆる整理されているかというところと、日本の伝統音楽について、どのような曲を選曲して、音楽の教育の場に教材として提供しているか。また、心の通う合唱曲ですが、こういうものを見て、私はB者を1位にしたいと思います。そして2位をA者にしたいということです。

○和田教育長　音楽につきましては、中学生の時期というのは変声期を迎えるということもありますし、同時に思春期の初めということで、自己表現に関しても照れや恥ずかしさが先に立ってしまうということで、どうしても躊躇してしまいがちな授業かなと思っております。そのような意味でいいますと、生徒たちがすんなりと入り込める工夫や、子供たちの成長に合わせて選ばれた曲、そして知識が提供されることが必要だと思います。

台東区の場合には土地柄、江戸時代からの庶民の伝統芸能、また歌舞伎などとも縁が深いので、さらに近々行われますが、薪能などとも大変つながりがあるということで、そういうことにも関心を向けられるような内容であればと思ってございます。

同時に、知識だけではなくて、そういうものに演技として携われる体験もできればと思っていますので、疑似体験になるかもしれませんが、教科書でできるだけそういうことに触れる機会をつくってもらえればと思っております。

そのような中で、A者は伝統楽曲が非常に豊富でございまして、全体的にもやや収録数

も多いかなと思っておりますが、一方、B者のほうについては、巻頭の学習マップというのが、学習をするのに効果的だと思います。音楽を演奏するだけ、歌うだけ、聞くだけではなくて、実際に学問というと大げさかもわかりませんが、学習対象としてどのような分類で自分たちが臨んでいるのかということの位置づけがはっきりわかるという意味では、1年生、2年生、3年生の巻頭にあります学習マップが非常に効果的だろうと思います。と同時に、単元ごとにその単元では何を目標とするのかということも、わかりやすく巧みに書いてありますので、私はこの音楽一般につきましては、B者を推したいと思います。

以上です。

○末廣委員　私もこのA者とB者は、非常に優劣をつけるのが難しいと思いました。それぞれよさがあって、それぞれカラフルな写真も使っている。見た目も非常にきれいですね。楽曲もほとんど、和の部分と洋の部分が、両方ともバランスよく入っていると思います。

ただ、B者のほうは、いわゆるオーケストラの楽器を紹介するというようなところでは、演奏者、それぞれバイオリンならバイオリン、ビオラだったらビオラ、全部演奏者が入ったところでその楽器の説明があって、非常にわかりやすい。また、見た目で非常に理解しやすいところが多いと思います。

そこのようなことで、音楽の一般に関しては、甲乙つけがたいですが、B者を第1位にいたします。

○髙森委員長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言いただきましたが、集計結果につきまして事務局、お願いいたします。

〔集計〕

○髙森委員長　ただいまの集計結果につきまして、1位にA者を挙げられた方は2名、B者を挙げられた方は3名。第2位にA者を挙げられた方は1名、B者挙げられた方2名となっております。

結果として、1位にB者を挙げた方の数が3名と、最も多く過半数を超えております。

このことにより、音楽の一般については、B者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

（なし）

○髙森委員長　それでは、音楽の一般についてはB者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんでしょうか。

（異議なし）

○髙森委員長　ご異議ございませんので、音楽の一般についてはB者に仮決定いたしました。

〔発行者名公表〕

○髙森委員長　　決定した発行者名について公表いたします。

発行者は、教育芸術社でございます。これにより、音楽の一般につきましては教育芸術社に仮決定いたしました。

音楽（器楽合奏）

○髙森委員長　続きまして、音楽の器楽合奏についてご審議願います。

発行者は2者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

私から順に発言をいたします。

器楽につきましては、二つの視点で私は比較いたしました。一つ目は、器楽の特色ということについてどのような記述がされているか、二つ目は、具体的な本編の内容についてどのような記述がされているか、それぞれ比較いたしました。

まず結論といたしまして、私はA者を1位に推薦したいと思います。

A者の特色・魅力は、その内容の部分ですが、リコーダーやギターのチューニングについてまで写真入りで丁寧に解説されています。それから、打楽器の紹介がされていますが、非常に詳しいです。長胴太鼓、締太鼓を初めとする打楽器の種類が非常に多く紹介されています。

もう一つは、先ほど和田教育長から音楽のことで指摘もありましたが、2ページ目から3ページ目に音楽学習マップというのがありますが、目当てが明確でわかりやすいというのは、確かにこのA者の特色ではないかと思います。「学習の窓口」のアイコンも一目瞭然です。それから2年生・3年生の下には50ページに著作権についての解説もございます。そういった意味でA者を第1位に選びたいと思います。

第2位にはB者を選びたいと思いますが、B者の特色としましては、折り込みになっている日本の楽器と音楽の変遷図というのが特色的で、非常に興味深く拝見いたしました。これがB者の特徴だと思いますが、全体的に見ましてA者のほうが具体的な実践例、非常に詳しく載っているということで、私はA者を1位に、B者を2位に選びたいと思います。

○樋口委員　1位をB者にしたいと思います。

理由は、いずれの教科書について甲乙つけがたい一方で、本区の小学校、中学校の卒業生である村治さんが裏表紙に代表的なギタリストとして出ているということがありまして、後に続く本区の中学生においては大変な自慢であり、将来における自分たちの成長過程における大変な自信にもなるだろうと思います。

したがいまして、B者をぜひ推したいと思います。

以上です。

○和田教育長　私は、1位をB者でお願いします。

器楽の場合に、楽譜の知識、読み方を習うのは前提としてありますけれども、さらに楽器の演奏ということで、教師が実際に実技で指導することは、なかなか難しいものもございます。目の当たりにできない、そういうものについて写真などでわかりやすく出ているもの。また、見たこともない楽器を見ることができるという意味でも、非常にB者の場合には丁寧に出ているような感じがいたします。

同時に、簡単な楽曲から発展的なものまで、生徒の習熟度に応じた活用ができるという意味でも、大変いいと思いますし、とりわけ、曲の中で伝統楽曲がA者に比べますとかなり多いという感じもいたしますので、私はB者を推したいと思います。

以上です。

○末廣委員　私は、結論から言うとA者ですが、各楽器について、その奏法を非常に丁寧に説明されているという気がします。それから、打楽器の紹介が非常に多いですね。

そういった点で、あまり差はないですが、私はA者を推薦いたします。

○垣内委員　私もA者です。

どちらも非常によく工夫されていて、発展段階に応じた教材となっていると思いますし、多様な選曲となっているところも魅力だと思います。A者とB者の差は、あえて言うなら、A者のほうが器楽として取り上げる楽器の数が少し多くて、器楽、楽器を演奏することのイントロダクションとして、広く浅く教材が準備されていて、カバーしやすいということで、教材としても使いやすいのではないだろうかと思ったことが理由です。

B者のほうは、非常に丁寧に、若干やや深めに教えることができるのかなと思いました。どちらも非常にいい教科書だと思いますが、義務教育段階での中学校の教材としては、広く浅いほうが器楽の場合はいいのかなということで、第1位にはA者を、第2位はB者といたしました。

以上です。

○髙森委員長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言いただきましたが、集計結果、事務局お願いいたします。

〔集計〕

○髙森委員長　ただいまの集計結果につきまして、1位にA者を挙げられた方が3名、B者を挙げられた方が2名。2位にB者を挙げられた方が2名となっております。

結果として、1位にA者を挙げた方の数が3名と、最も多く過半数を超えております。

このことにより、音楽の器楽合奏については、A者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

○和田教育長　村治佳織さんにこだわるわけではありませんが、台東区ではジュニア・ギターコンクールというものが、20年近く開催されております。これは実際に村治佳織さんの優勝した場所でもあって、今や日本の子供たち全体のジュニアギターコンクールの登竜門ということになっております。そのような意味では、台東区の子供たちにも、台東区出身の彼女のことを、この音楽の教科書でなくてもいいから教えておいてあげたいなと思いますし、このことが一つのきっかけになるのではないかと思ったところでございます。余談で申し訳ありませんが、そのように思いました。

○末廣委員　ほかの場面で、おそらくできると思いますよ、村治さんについてはね。

○垣内委員　私は、伝統音楽の重要性ということも少し強調しておきたいと思います。私が推したのはA者なのですが、幅広くいろいろなものをご紹介されておりますけれども、

やはり伝統文化の中の音楽というのは非常に重要な部分がありますので、その点も学校現場で教えるときにはご配慮いただきたいと思います。伝統的な音楽を教えるだけのスキルが、今は十分にない現状がありまして、それは過去の音楽教育が非常に西洋音楽に偏っていたという部分もあったかと思いますけれども、そこの部分も少しご配慮いただきながら、伝統芸能の実演家がまだたくさんいるというこの地域性を生かしていただけるといいなと思っております。

やり方はお任せしたいと思いますが、伝統芸能、そういった音楽の重要性を、そして楽しさをぜひ教えていただければと思います。

○髙森委員長　今おっしゃったことで、私も言っておきたいのですが、これだけいろいろな楽器が紹介されている中で、学校で実際に生徒たちが手にとって、音を鳴らせるものは少ないということですが、確かに学校の中にはないと思いますが、地域にはもしかしたらたくさんあるかもしれませんよね。近いところでは、東京藝術大学に行けばいろいろな楽器に触れる機会もあるかもしれません。そういったことをうまく活用して、音楽教育の中に取り入れてもらえればいいかなと思います。

それでは、音楽の器楽合奏については、A者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんでしょうか。

（異議なし）

○髙森委員長　ご異議ございませんので、音楽の器楽合奏についてはA者に仮決定いたしました。

〔発行者名公表〕

○髙森委員長　それでは、仮決定した発行者名について公表いたします。発行者は、教育芸術社でございます。これにより、音楽の器楽合奏については教育芸術社に仮決定いたしました。

ここで、議事の進行中ではございますが、一時中断をいたしまして10分間休憩をとりたいと思います。再開は午後4時5分といたします。よろしくお願いいたします。

それでは、これより休憩といたします。

（休憩・15：54～16：05）

美術

○髙森委員長　では、引き続き審議を継続いたします。

次に、美術についてご審議願います。

発行者は3者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

樋口委員からお願いします。

○樋口委員　美術ですが、3者ともに、本当によく工夫されていると思います。ただ美術である以上、やはり色の問題は重要であろうかと思います。結論からいいますと、B者が1位、A者が2位でお願いしたいと思います。

理由は、色刷りがきれいだというのがありますし、本区で進めております世界遺産の候補になっている建築家ル・コルビュジエの作品についても、取り上げられているということが大きな理由であります。

以上です。

○和田教育長　美術については、今日の教科書採択の中で何度か申し上げていますが、生徒がその学科に興味・関心を持つことが非常に大事で、この美術についてはその最たるものかなと思っております。といいますのは、数学、国語などのように、自分の学習の成果を自分自身で評価することがなかなか難しい典型的な学科だと思います。そのような意味で言いますと、少しでもこの美術の中身に関心を持ってもらうということが大事だと思っておりまして、この教科書の役割は、まさにその興味・関心、先ほどほかの学科で垣内委員が、わくわく感というお言葉をおっしゃいましたけれども、まさに美術の教科書を見てわくわくするような、そのようなものがあるといいなと思っているわけでございます。

なかなかそのようなものは難しいのかなと思っていましたが、今回拝見していて、一番そのわくわく感があって、これは抜群だなと思いましたのがB者でございます。そのような観点では今回、B者を1番に推させていただきたいと思っております。

そのB者につきましては、一番身近な東京藝術大学の学生であった、その藝大にも作品が残っております高橋由一の有名な「鮭」の作品が掲載されているものもありますし、いろいろと台東区に関係する作品が出ているということ。と同時に、さまざまな西洋の画家や日本の伝統的な作品等も次から次に出ておりまして、見ているだけで非常に楽しめるというものもあります。個々の、自分が創作に関わるという面で、どの程度子供たちが意欲を持ってもらえるかというのはわかりませんけれども、今後そのわくわく感を大事にした教科書によって、子供たちが鑑賞力、創作力をつけるとともに、将来的には日本の伝統的な絵画等も見ることによって、修学旅行などでの楽しみにもつながるのかなと思っております。

同時に、B者の場合には版が大きいということと、さらに生徒作品も多く入っているようでございますので、B者をお願いしたいと思います。

２番目にはC者を推したいと思います。C者は伝統文化、伝統美術の中でも、例えば唐草文様や、江戸小紋などの文様のおもしろさを非常に上手に掲載をしています。これは永遠のヒットデザインであることと同時に、日本の美術作品についても一番多く掲載しているのがC者であることもありまして、２番目にはC者をお願いをしたいと思います。

以上です。

○末廣委員　この美術というのは、音楽もそうですが、専門家を養成するというよりも、我々一般の人間は、鑑賞して楽しむという、特に美術あたりはそういう面が強い。ですから、鑑賞力があるといいますか、見て楽しむという、そのようなことができると人生も非常に豊かなものになるのではないかと、そういう観点で選びました。結果的には、B者を第1候補、C者を第2候補にいたします。

特にB者は、今話がありましたように、非常に作品が、たくさん収容されていますし、写真が非常に大きくて、その点も良いと思います。それから、作品をつくった作者の言葉というのが書かれておりまして、非常に見る者がわかりやすいと感じます。

それから、日本の浮世絵や版画、絵巻など、そういうものを紙質を違えて印刷しているということで、非常に丁寧な見開きで、北斎のものが、これだけ大きく見られるというのは、非常に結構ではないかと思います。

それからC者もいいのですが、ネーミングが結構おもしろいですね。生徒の興味を喚起するようなネーミングがそれぞれの項であります。「空想の世界を旅する」「あれ？どうなっているの」「見方を変えて」、それから「想像の生物をつくる」「浮世絵から学ぶ江戸の職人芸」など、そのような非常におもしろそうだなというネーミングがたくさんある、ということで第2候補としてはC者を推薦します。

以上です。

○垣内委員　ほかの先生方もおっしゃったように、美術というのは自己表現の一つで、人間の本源的な活動の一形態だと思います。ですから、そういった自己表現を可能にするような入り口としての役割を期待したいということと、あわせて、やはりビジュアル表現なので、正確な色彩ということも重要ではないかと思います。この2点で3者比較してみました。

いずれもビジュアルが多く、表現と鑑賞のバランスもよくとれていると思いますし、また各者デザインを生活に生かしていくといったようなことにも力を入れているというところ、大変好ましく思いましたが、その中で、第1位としては、私はB者を推薦したいと思います。

パブリックアートや浮世絵、漫画、デザインなど、多様な美術の事例を提供し、手法にもさまざまなものを取り入れているため、資料としてもとてもよく工夫されているという点が一つの大きなメリットだと思います。

二つ目は、色感図です、非常に正確できれいではっきりとわかりやすいということと、あとパースペクティブなどについても丁寧な説明があるということで、最もバランスのとれたテキストではないかと思いますので、B者が第1位。

第2位は、キャラクターから浮世絵、和菓子からまちづくりまで幅広い題材を提供して、関心を喚起する工夫がなされているC者を推したいと思います。

学習を支える資料も豊富で写真もわかりやすいと思っております。残るA者も、絵巻物だったりデザインに明かりを取り入れたりなどの工夫があって楽しいですが、中でも一番バランスがとれたB者が第1位ということです。

○髙森委員長　私は、美術に関しては、例によって美術を学ぶ意義がしっかりと体系化されているかどうか。それから、色彩の再現力、リアリティが忠実かどうか。それから、構図や道具の使い方などの技法の部分が詳しく載っているかどうか。また、パースペクティブの話がありましたけれども、図法についてはどのような説明がされているかどうか。更

に、美術にはあまり見られない部分だと思いますが、導入振り返りがしっかりとつけられているかどうか等々の観点から比較いたしました。

結果、私は、美術は確かにわくわく感など、特にこの教科書を見てぜひつくってみたいという、そのようなモチベーションが湧いてくるものもいいのかもしれませんが、実際に今度つくるとなると、そのつくるための技術の部分が詳しい教科書がいいのではないかなと思いまして、そうしますといろいろな各委員の先生方のご意見もわかるのですが、私は、1位はC者を推したいと思います。

C者は特に巻末の部分には学習を支える資料というところで、そのような技法のことが詳しく載っています。特に鉛筆、色鉛筆、ペン、マーカー、パステル、水彩絵の具、アクリル絵の具、ポスターカラーなど、画材によってさまざまな技法があることを細かく解説しているのは、このC者だけでしたので、その具体的な実践面という部分では、このC者の教科書が非常に参考になる部分が多いのではないかという気がいたしました。C者は、テクニック重視型ということになるでしょうか。巻末の技法の紹介も他の発行者より抜きん出ているということでC者を推したいと思います。

2位はB者です。

推薦する理由は、ほぼ同じですが、特に偶数ページの左上には、鑑賞、表現といったタグが設けられていて、内容が瞬時に把握できる。それから2年生、3年生は上下2分冊されていて使い勝手がいい。コンテンツ量も充実している。それから振り返りに関しては、A者だけがほかにはない振り返りを持っている教科書なのですが、振り返りについては管見の限り、B者、C者にはありません。

いずれにしても、私はC者を1位、B者を2位に推薦をしたいと思います。

以上です。

ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言いただきましたが、集計した結果について、事務局お願いいたします。

〔集計〕

○髙森委員長　ただいまの集計結果につきまして、1位にB者を挙げられた方が4名、C者は1名。2位にA者を挙げられた方が1名、B者が1名、C者が3名となっております。

結果として、1位にB者を挙げた方の数が4名と、最も多く過半数を超えております。

そのことにより、美術については、B者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等はございますでしょうか。

○和田教育長　美術の教科書の宿命ですが、先ほど委員長から作品のリアリティの話がありました。台東区の場合には、ご存じのように上野の山に大変いろいろな美術関係の施設もある、博物館もある。そういう意味では、この美術の教科書に挙がっている作品を生で見る機会も非常に多いと思いますので、そういう面でもリアリティを十分補完できる土地柄、環境に恵まれていると思いますので、学校でも十分活用してもらいたいなと思っているところでございます。

○高森委員長　学びのキャンパスを存分に活用してほしいと思います。

ほかいかがでしょうか。

（なし）

○高森委員長　それでは、美術については、B者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○高森委員長　ご異議ございませんので、美術についてはB者に仮決定いたしました。

それでは、B者の発行者名、事務局お願いします。

〔発行者名公表〕

○高森委員長　それでは、仮決定した発行者名について公表いたします。発行者は、日本文教出版でございます。これにより、美術につきましては、日本文教出版に仮決定いたしました。

保健体育

○高森委員長　続きまして、保健体育についてご審議願います。

発行者は4者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言を願います。

和田教育長からお願いいたします。

○和田教育長　保健体育につきましては、中学生は思春期を迎えて、自分や他人の身体への関心、また性や容姿などへの不安や羞恥心が極端に高まる時期です。同時に、身体の成長に心の成長が、ともすると遅れがちになってしまうのではないかという時期でもございます。

これは昔から言われていることですが、まさに今の時代、非常に現代的なテーマであり、保健体育の授業ではそれらの課題や子供たちの疑問や悩みを正面から、あるときは言外にも気づきを促すようなことが必要になっていると思っております。このことは本区が推進しております人権尊重教育とも通じるものでございまして、自分を大切にすること、そして性別の違いや障害者、高齢者、さらには性的マイノリティなども含めて理解を進めることが必要との考えでございます。

また、自らの健康を管理する知識、生活習慣、同時に生活範囲が飛躍的に拡大することに伴いまして、環境の変化や事故防止などの対応など、自らの命を守るために新たな注意を喚起していく必要もあるわけでございます。

一方、体育の面におきましては、健康管理的な面もありますが、スポーツへの興味・関心を高めるとともに、今、本区の重要課題の一つとなっております、オリンピック・パラリンピックへの意識喚起、関心の高揚、さらに健全なスポーツ社会への足がかりを行っていきたいと思っております。

今回の、どの教科書も東京開催が決まったことが一昨年の秋ということもあって、非常

に急仕上げという感じがいたしますが、オリンピック・パラリンピックについての記述も取組みがかなりあるので、期待をして拝見をさせていただいたところでございます。

そのような中で、私が第1位に挙げますのは、B者でございます。

このB者につきましては、巻頭に、この授業で保健体育が何を学ぶのかということを豊富な写真で上手に引き込んでいると思っております。また性の問題ですとか、出会い系のことにも恐がらずに触れておりまして、子供たちにとっても非常にいい学習になっていると思います。

あわせて、健康管理項目、喫煙、飲酒、薬物乱用のページ数もかなりしっかりと押さえているということと同時に、随所にコラムがあるのですが、そのテーマも「なぜ生きているんだろう」というようなテーマから、「せきをするときのエチケット」ということまで硬軟とりまぜて知識が豊富に掲載されておりまして、非常に興味深い内容になっているところでございます。

また、今般、台東区でスタートをさせました地域総合スポーツクラブのことにも触れておりますし、オリンピック・パラリンピックでも人見絹枝女史の活躍を取り上げて、女性スポーツの皮切りだったということにも触れているのは、非常に好感が持てるなと、子供たちに情報量も大変多く提供できるのではないかと思っております。

２番目に推しますのは、C者です。

C者につきましては、ほかの発行者に比べて、版が大きくなっておりまして、その分情報量、あるいは写真の掲載などもしっかりとされていると思います。オリンピック・パラリンピックにつきましても、こちらは台東区民でいらした方になりますが、佐藤真海さんの話から始まって10ページ、そして文化とスポーツについて、オリンピック・パラリンピックに非常に丁寧に触れていると思います。

また、ストレスやその対処法についての例を示すとともに、巻末、索引とともに用語解説があるというのも丁寧で親切だと思っております。私たちも経験がありますが、この時期に体育もさることながら、保健に対する知識というのは、なかなか自分自身では学びきれないもの、今はインターネットなどで情報量が豊富といわれますけれども、バランスのとれた情報を得ていくということは非常に難しい時代でもありますので、学校での授業の中でしっかりと提示していけるものを選んだということでございます。

以上です。

○末廣委員　保健体育というのは、簡単に言えば体と心の問題、これを取り上げている教科であると思います。そういう点で、特に最近は心の問題といいますか、特に中学生の心の問題が今、社会問題になっている。そういうことに対して、教科書がどう捉えているかというのが一つの大きな観点です。

それから、安全性といいますか、例えば公害が発生する要因は何か、交通事故の発生要因は何か、あるいは心肺蘇生法、応急手当の意義、そういうものが強調されてくるのではないかと思います。

あとは、やはり心の問題ですが、心のケア、ストレスの対処法、そういうものも具体的に考えていく必要があるのではないかと思います。

そういう観点から、まず1番目には、C者を推薦します。それから２番目には、B者を推薦いたします。

特にC者はバランスよく扱っているのではないかと思います。コラムや読み物、「やってみよう」や「考えてみよう」、そういったコラムも非常に充実していて、写真や図、資料が他の発行者に比べて多いのではないかという気がします。

そういうことでC者を1位、B者を２番目ということで推薦します。

以上です。

○垣内委員　保健体育は心身の健全な発達という、今後の長い人生の基礎となる、そういった知識をきちんと身につけるという意味で、非常に重要なものだと思いますが、各発行者とも、そのあたりの内容面については今日的課題も網羅されていますし、学習方法についてもきちんと説明がなされているという点では、さまざまな工夫がされていると思います。

ただ、学習からそれをやってみようという実践に結びつける、そしてまたさらに、その意味を考えて生活の中に生かそうといった、一連の流れでより生徒に考えさせるプロセス、それから学習を深める配慮がある、振り返りも含めて、そのような工夫がなされているという点で、第1位にC者を推したいと思います。

各章ごとのチェックリストと活用といったページも学習した知識を定着させるための工夫として大変よいと思いますし、応急手当だけではなく、例えばスポーツを行うときの注意といったようなこともチェックリストも載っているという意味で、非常にバランスよく情報量も豊富に網羅されているので、第1位がC者。

第2位は、B者を推したいと思います。

前半に体育編で後半に保健編という構造ですけれども、それぞれ相互参照しているということで十分に工夫されていると思います。また提供されている内容も非常に濃いのですが、若干そこが教員によって差が出てくるのかなという感じがしたものですから、C者が第1位で、第2位がB者ということにしたいと思います。

○髙森委員長　私は、まず保健体育を学ぶ意義がしっかりと定義づけられているかどうか。それから、心と体の問題という話でしたけれども、特に心の病についての記述はあるかどうか。それから応急手当、これについてはどうであるか。リスク教育、防犯防災、特に事故や犯罪について人的、環境的要因といったことの解説がしっかりとなされているかどうか。

具体的な事例としては、一つには生活習慣病、現代の子供が抱える課題として挙がってきているこの生活習慣病については、どのような記述がされているか。それから、昨今、報道でも注意喚起されている感染症についてはどうか。それから、薬物や、医薬品ににについてはどのように記述されているか。病気の治療法については示されているかどうか。歯

の健康、口腔衛生について記述があるかどうか、高齢者や障害者、マイノリティに対する理解が示されているかどうか、そのような視点で比較をしてみました。

その結果、私は1位をB者、2位にC者を推したいと思っております。

B者のすぐれているところは、例えば応急手当の部分で、両者ともそれなりに応急手当については書いてありますけれども、歯が抜けたときや、やけどに対しての応急手当の仕方が書いてあり、情報量も4者の中で一番多く整理されている気がします。

それからB者のもう一つ興味深かった点は感染症についてで、感染症の記述は従来の感染症だけではなくて、エボラ出血熱や、新出の感染症も表形式で紹介されている。予防のイラストも非常に見やすい。ほかに比べるとそういったところが特徴です。

それから薬物について、これも4者の中では群を抜いて、薬物の種類、特徴の説明、それから薬物依存の症状の特徴、社会への影響に関する説明がしっかりとされています。医薬品については、4者中最も多く4ページを割いて使用法と副作用の解説がある。これがB者です。

また病気の治療法について、4者とも病気にならないための予防については随所に説明があるのですが、病気になった後の対処法についての記述はほとんどありません。B者は医療機関、保健機関とその利用というものがあり、152ページには医師とのかかわり方の10か条、具体的な記述があるのはなかなかおもしろいかなと思いました。全体的にB者は発展的内容が多く、情報量も多いほうだと思います。

第2位に推薦をしたC者でございますが、C者はほぼ全ての項目、章でチェックリストが冒頭にあるということは興味深かったですね。ほかの発行者ではD者もありますけれども、C者はチェックリストが非常に充実しています。全てにチェックリストが網羅されています。それから病になったときの対処法についても病状に応じた医療機関受診法というものが140ページに記載されていて、これはB者にもありましたけども、他の発行者にない特徴であったということです。

C者はB者に比べて、内容としてはそれほど情報量は多くないのですけれども、考えさせる内容の多い部分があるかと思います。情報量が多いほうがいいのか少ないほうが教えやすいのか、難しい問題です。少ない場合は確かに教員が教えやすいとおもいますが、教員は全て100％教えなくても、足りない部分を教科書をもとにして生徒が自分で学習できるという意味では、B者のほうがいいのかなということで、B者を1位に、C者を2位に推薦したいと思います。

○樋口委員　思春期を迎えた中学生の心身の健全化というところでは、この科目は非常に重要な科目であろうかと思います。体のメカニズムを中学生のこの時期に理解し、その一方で、体を動かしてこういうことができるということをこの時期に学ぶべきことだろうと思います。

したがって、学んだらある一定の復習ないしは確認をした上で自分の体の成長を促していくというところがポイントになろうかと思います。そのポイントから選びますと、私は

1位がC者、2位にB者を挙げたいと思います。

C者は特に生徒の中において重要な問題をテーマに、性行動及び思春期における社会性の発達等の説明がわかりやすく説明されていることがポイントであります。

B者もそんなに大きな差はないのですが、C者に比べて少しわかりにくいところがあるかなと思いました。順位をC者1位、B者2位としました。

以上です。

○髙森委員長　それでは、ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言いただきましたが、集計した結果について、事務局お願いをします。

〔集計〕

○髙森委員長　ただいまの集計結果につきまして、1位にB者を挙げられた方が2名、C者を挙げられた方が3名。2位にB者を挙げられた方が3名、C者を挙げられた方が2名となっております。

結果として、1位にC者を挙げた方の数が3名と、最も多く過半数を超えております。

このことにより、保健体育につきましては、C者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

私からの要望として、学習指導要領にその必要性がないから書いてないのかもしれませんが、歯の健康、口腔衛生の記述が、すべての教科書において一切ないのです。これはなぜなのかわかりません。保健体育なのに。台東区ではご承知のとおり歯の優良児童生徒表彰も行っておりますので、どこかでそのことの教育、啓発も必要なのではないかなという気がいたします。足りない部分は教科書以外のところでもご指導いただければなと思います。

ほかいかがでしょうか。

（なし）

○髙森委員長　それでは、保健体育については、C者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○髙森委員長　ご異議ございませんので、保健体育につきましてはC者に仮決定いたしました。

それでは、C者の発行者名について、事務局お願いします。

〔発行者名公表〕

○髙森委員長　では、仮決定した発行者名を公表いたします。発行者は、東京書籍でございます。これにより、保健体育につきましては東京書籍に仮決定いたしました。

技術

○髙森委員長　次に、技術についてご審議願います。

発行者は3者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言をお願いしたいと思います。

それでは、末廣委員から順にお願いをいたします。

○末廣委員　技術については、いわゆる実習していくことがこの教科としては一番の目的ではないかと思います。技術の分野はどういうものかという、まずその説明が詳しくあるかどうか。それから、技術の世界で活躍している人、どういう人がいるか、それからほかの教科とどういう関係が出てくるのか、いろいろとそういう問題もありますが、実際に技術を教室で実習していくのか、そういうのがどの程度あるのか、そういったいろいろな観点があると思いますが、結論から申しますと、第1位にB者、第2位にC者です。

B者は、実習をやる上で安全にというのがまず第一にコンセプトとしてあります。それからその後に技術分野のガイダンスが出てきます。それから、実際に実習をしていく場合、例えば木材や金属、プラスチックを使っていくわけですけれども、その技術があって、それを木材ではどういうふうにしていくか、金属ではどういうふうにしていくか、プラスチックではどういうふうにしていくか、例えばけがきとか、切断とか、かんな類ですね、そういうものはどうしてやるのかということを、一つの技術にいろいろな材料を当てはめて説明している。これがB者ですね。

材料別に、木材なら木材と決めて、それによって木材の場合、けがきから、切断、削り、穴あけなど、材料別に説明していく。そういう違いがあります。C者はそのやり方ですね。

それから、コラムでは技術の匠といいますか、いわゆる職人とかプロですね。その人を紹介しています。それから、小学校とか他教科との関連など、そういう形で技術に興味を持たせる工夫がなされています。

そういうことで第1位がB者、第2位がC者ということになります。

以上です。

○垣内委員　技術に関しては、生活に必要な技術を身につけるということと、その実践力をつけるという両方があるというふうに思いました。いずれの教科書もイントロダクションのところと学習の方法や目的ということを明示していますし、マークを併用してわかりやすくする工夫、それから発展問題、また安全についての説明、そしてＩＴからものづくりまで非常にバランスよく工夫されて構成されているかなと思いました。ただ、若干差がつくとしますと、説明の丁寧さ、要求する事例のレベルといったところに少し差があるのかなと思いました。

この中で第1位はB者といたしたいと思います。このB者では、「この教科書で学ぶ皆さんへ」ということで、導入部からどういう経緯、プロセスを経て学習のまとめまでいくのかといったようなイントロダクションが非常に丁寧で、また一番最初のところに安全の問題も取り上げていますし、それからガイダンスというところで、「技術は夢をかなえるためにある」というようなことで、関心をうまく引き出しながら進めていくという工夫がなされている点が第一に高く評価できると思います。

情報量も非常に多く、全般的に丁寧な説明で、教材としてすぐれているなと、読んでいて非常に勉強になりました。また、基本だけではなく応用も記載されているので、生徒の要求度や学力、技術力などに応じて、幅広い使われ方もできるということで、B者が第1位です。

第2位はC者、これはやはり写真が非常に充実しているということと、生活や産業と密接に関連づけているので、より応用編がわかりやすいという意味でC者を第2位としたいと思います。

以上です。

○髙森委員長　視点としては、技術を学ぶ意義がしっかりと定義づけられているかということでは、今、垣内委員からご指摘あったように、B者は非常に充実しています。「この教科書で学ぶ皆さんへ」、3ページから全体を俯瞰する学習観がしっかり示されている。それから「技術分野のガイダンス」というところで、個別の学びの意義を12ページにわたって解説しているという意味ではB者は非常にすぐれていると思います。一方C者もガイダンスは19ページにわたって取り上げられています。

それから、内容の部分では、それぞれの分野、ものづくりの分野、エネルギーの分野、栽培飼育の分野、情報技術の分野でそれぞれ比較いたしました。その他、いろいろな付録がついている部分も少し検討いたしまして、その結果、私はB者を1位に推したいと思います。2位はC者です。

B者を選んだ理由は、今、委員の皆様がおっしゃたようなこともあるのですけれども、それぞれカテゴリーごとではどうなのかというところで見たところで、ものづくりの部分では、ほかの2者にない特徴としては製図、設計図の説明が非常に詳しいというところがあると思います。エネルギーの分野では、取扱い説明書のつくり方というのは、ほかの発行者にはなかったのではないかと思います。それと情報技術の分野では、これはC者にもあるのですが、デジタル技術に関する基礎知識が非常に充実しています。それからセキュリティ、情報モラル、知的財産、個人情報などの記述が非常に詳しいという特色があります。その他の部分で興味を引いたのは、巻末の付録になっている「防災手帳」、これはなかなかほかの発行者にはないです。C者には巻末に付録の「コンピュータの基本操作」というものがありますけれども、どちらもなかなか捨てがたい付録ではないかと思っております。

いずれにしても、B者はものづくり、エネルギーの部分では基礎機能を中心にしているので、汎用性、実用性が高いのかなというところも含めて、私は第1をB者、次がC者ということで推薦をしたいと思います。

○樋口委員　この科目は、現在及び将来、この生徒が周りの必要なものを自分でつくることができる、及び産業に対して自分がどういう仕事をするのかという二つの側面で、重要な科目だろうと思います。

そこで、3冊読んだときに、A者の情報量と選択的な説明についておもしろいなと興味を

もって読みましたが、これを現場で教員が使うとなると、特に情報技術のところはかなり難しいだろうと思いますし、ほかのことについても説明はとてもいいのですが、教える場合においては、先端的過ぎる印象がありました。

中学における教室での勉強と、その習熟ということについて有効なテキストを選ぶとなれば、B者が1位で、C者が2位ということであります。特に、C者が1位ということについて言及するならば、それを生徒の気づきや発見を促していることと、まとめのところで再度自分がいろいろなものをつくったり、知識を習得した後の発展系についての見直し、ないしは復習についてやりやすいところがあるというところであります。

以上です。

○和田教育長　かつて日本も、そして台東区も、ものづくりということが非常に売りであったわけであります。しかしながら、今、だんだんその実態が薄れてまいりまして、これから日本のものづくり産業はどうなっていくのだろうというようによく言われているところでもあります。台東区の場合には中小企業、皮革産業、伝統工芸職人の方々、本来的にものづくりにしっかりと取り組んでいる組織、あるいは個人があったわけですが、そういう面で、もっともっと台東区に住んでいる子供たちがそういう方向に目を向けてもらいたいというのが希望でございます。

今、子供たち、中学生の高校進学の際の選択の傾向を見ておりますと、普通科が昔に比べるとはるかに優先度が高くなっておりまして、工業系など、いわゆる技術系への進学希望というのは、かなり少なくなってきているという状況でございます。台東区内には、都内でも有数の有名な技術系の高校もあるわけでございまして、その出身者が社会的にも活躍している実態を見ますと、もっと台東区内でそういうことを志してくれる子供がいてくれるといいなと思っております。

また台東区では、少年少女発明クラブもございまして、これも毎年、今80名の定員枠ですけれども、それをはるかに超える数の希望があり、抽選で小学校4年生から中学3年生が少しずつ抽選で落ちてしまうということで、非常にかわいそうな状況でございます。

子供たちは基本的にはこういうふうな創造的な作業が好きなんだろうと思っております。ところが、やはり受験のための学習等において、どうしても後回しになってしまいがちな傾向があるかなというふうに思いました。

技術の科目については、そもそもは実技ですとか実習に時間を割いてもらいたいとは思いますけれども、材料確保のことも先ほど来お話も出ていました、エネルギーの話ですとか、情報通信など、そういった分野ではむしろ座学の中で必要となる知識が非常に多岐にわたっているということもありますので、従来に比べると座学の比重が大分高まってきていると思っております。そういう意味でもとりつきやすい構成、あるいは教科書の装丁が必要になると考えているわけでございます。

私はこの中で、第1位にはB者です。

理由といたしましては、まず冒頭、巻頭に技術というものをどう考えるかということの

中に、表題として「技術は夢をかなえるためにある」ということで、非常に心を引きつけるような言葉があり、楽しみだなと思いました。そしてページごとに索引がありますけれども、これがまるで電気製品の取り扱い説明書的に表示されておりまして、これもまたなじみやすいなと思いました。

そして、先ほどお話にもありましたが、「技術の匠」というコラムで、町工場の経営者の方ですとか、農家の経営者の方の生の言葉を引用しており、自分たちの身近な仕事にそういうものが生かされているということで、ほかの発行者にはない企画であったと、非常に興味を引いたところでございます。

あわせて、情報セキュリティについて大変丁寧に説明していると思います。ほかの2者に比べますと、そもそもの扱いも含めながら、セキュリティの大切さについていろいろな被害状況なども合わせながら上手に説明していると思いました。

第2位は、C者にしたいと思います。

ものづくりの中で、今、知的財産権について現在注目されているところですけれども、C者は、委員長のお話にもございましたけれども、知的財産権について上手に説明しておりまして、中学生たちもものづくりに取り組む際には、どういう意味合いを持っているのか、あるいは人がつくったものに対してどのような取り組み方が必要になるのかということで、ものづくりのまちの人間として、この点は大変重要な事項でありますので、そういうことを取り上げていることは良いと思っております。あわせて、写真が多くてきれいに撮れておりますので、これもいい材料として推したわけでございます。

以上でございます。

○髙森委員長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言いただきましたが、集計結果について、事務局お願いいたします。

〔集計〕

○髙森委員長　ただいまの集計結果につきまして、1位にB者を挙げられた方が5名、2位にC者を挙げられた方が5名となっております。

結果として、1位にB者を挙げられた方の数が5名と、全員がB者を推薦しておりますので、このことにより、技術については、B者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

○樋口委員　教育長が言及されましたが、情報技術のところで情報セキュリティにおいて、盗用について記述されているけれども、今、大学では簡単に他人の文章をコピー＆ペーストしてしまうという非常に大きな問題がありまして、これはいわゆる違法行為であります。この点を、中学生の時から教えていただければと思います。

○髙森委員長　ほかいかがでしょうか。

（なし）

○髙森委員長　特になければ、技術については、B者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○高森委員長　ご異議ございませんので、技術についてはB者に仮決定いたしました。

それでは、B者の発行者名について、事務局お願いします。

〔発行者名公表〕

○高森委員長　それでは、仮決定した発行者名について公表いたします。発行者は、東京書籍でございます。これにより、技術につきましては東京書籍に仮決定いたしました。

家庭

○高森委員長　次に、家庭についてご審議願います。

発行者は3者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言願います。

垣内委員から順にお願いをいたします。

○垣内委員　家庭に関しては、生活にかかわる今日的な課題が非常に増えてきております。これに対して、衣食住、それから地域コミュニティとのあり方といったようなことを中心に、基礎的な知識を身につけて、よりよい生活ができるということが重要な目的だろうと思いますけれども、あわせて技術とも同じですが、実践的な学習という部分において、教材として優れているかどうか、この2点から比較検討をいたしました。

基本的に各発行者それぞれ工夫もよくなされていて、ガイダンスといいますか、ここで何を勉強するかということも説明されていますし、イラストも豊富で内容が工夫されていると思います。災害から消費者トラブルに至るまで、非常に多くの今日的課題をうまく取り上げられていると思うわけですけれども、第1位としては、私はA者を推薦したいと思います。

やはり、この教科書の一番最初のところに、非常に明確に「この教科書で学ぶ皆さんへ」ということで、この教科書がどういう構成になっているのか、また衣食住それぞれについての課題、それから実習を楽しく安全に進めるということ。それからガイダンスというふうにつながっていて、やはり導入部が非常にわかりやすいので、そのあとの知識の定着がスムーズにつながっていくのではないかと思います。学習のまとめというところで、学習内容の確認ができることも非常に重要なものではないかと思います。

また、私が見たところでは、例えば郷土料理などのご紹介もあり、工夫もなされていますし、家庭を学ぶ生徒の興味関心をうまく引いている部分もあるかなというところが一つ特色だと思いました。

もう一つの特色は、災害対策に関して非常に詳細にページを割いて説明をしているというところも高く評価したいと思いまして、第1位がA者です。

第2位はB者です。

ガイダンスもよく写真を中心に取り上げているので、非常にわかりやすいということ。それから学習の狙いに合わせたマークも適宜表示されていて、また「豆知識」といったよ

うなことで、情報量も多いというところでB者が第2位になりました。

以上です。

○髙森委員長　私は、まず家庭科を学ぶ意義についてしっかりと明記されているかどうかというところで、今ご指摘ありましたように、確かにA者は充実しております。「この教科書で学ぶ皆さんへ」ということで、全体を俯瞰する学習観が示されていて、ガイダンスで個別の学びの意義を17ページにわたって解説していて、よくまとめられて詳しいと思います。B者はその点で、ポイントが絞りにくいかなという気がいたしました。

それから、内容につきましては、食、衣、住、そして家庭地域、生活環境と、その内容の部分ではA者、C者どちらも譲れない、すばらしい内容になっているのですけれども、A者の特徴は、食品表示の具体例が写真で示されていて、その表示の読み取り方の解説が充実しているかなというところでございます。

C者に関しては、その辺りの表記は非常に簡潔ですけれども、C者の特色は食中毒の予防については3者中最も詳しいという、そこが特色だと思います。衣食住の衣について、A者のほうは衣類のタグ表記が各ページ散らばっていて、後々の検索性に難がある一方で、C者は衣類のタグ表記が4ページにわたって一括して紹介されていますので、なかなかこれは魅力的な部分ではございます。

それから、衣食住の住ですけれども、初めはA者もいいかと思いましたが、いま一度読み返してみますと、C者が「家庭内事故対策見取り図」、具体的にどういうところで事故が起きやすいか、あるいは、「快適な住環境の見取り図」というのを見開きで描かれていて、確かに充実しているかなと。

それから、生活環境の部分ですけれども、商品の購入方法のバリエーション、消費者トラブルの対処法ということもC者のほうが少し詳しく載っているのかなと思いました。

最初A者を考えたのですが、結果としてC者を1位に推薦し、A者を第2位に推薦したいと思います。

○樋口委員　おもしろい比較ができまして、まず、A者は「食生活」から入っている一方で、B、C者は「家族と家庭生活」から章が始まることになっております。二つ目は、委員長も垣内委員も言われましたように、家庭を学ぶということについて、いかにわかりやすく説明しているかということです。

私は、食の勉強から家庭を学ぶことが非常におもしろいかなと思います。と申しますのは、中学に入って、家庭の勉強をするようになり、保護者と話をするきっかけとして、この家庭科が、まず食の問題で調理をするということが会話のきっかけになるのではないかと思います。その一方で、どうやって調理をするかについては保護者の方も、この科目に関して関与できるだろうと思いますし、栄養面についても、子供が保護者にある一定の情報を出すこともできます。よって保護者と子供の会話について非常に重要な橋渡しがこの科目でできるかなと思います。

したがって、以上の2点から考えまして、A者が1位で、あとB者が2位ということでお願

いしたいと思います。

以上です。

○和田教育長　午前中の議論でも触れましたが、台東区では総合教育会議におきまして、教育大綱を策定をいたしました。その中で、台東区では家庭や地域の絆を大切にしていくんだということを明確にうたっております。社会科の公民の教科書にもありますように、家族はまず子供たちに最も身近な社会集団であって、やすらぎや支え合い、そして社会生活の基本的なルールを身につける場でもあるということでございます。すなわち、家庭のあり方というのは、地域や社会でも基本でありまして、そのありようが社会を本当に豊かなものにしていく鍵だろうと考えているわけでございます。

その家庭の基本的な要素である食生活や住環境、家族の支え合い、そして社会へのかかわり方などをしっかりと身につけておくことは、ひいては世の中の一構成員として社会を支える第一歩になるだろうと思っております。しかしながら、今の状況は核家族化の進行などによりまして、従来と大きな変化があるといわれております。その中で、最小単位である家庭というものをしっかりと形成する重要性を指導する必要があるだろうと思います。

私はこの家庭科についてはA者を第1位に据えたいと思います。

今、樋口委員からもお話がありましたが、学習指導要領の順番を含めまして、冒頭に食の文化、食生活を持ってきていると。これはやはり樋口委員もおっしゃったように、大変とっつきやすい内容で、まず家庭で食のことをやってみようということは、非常に意義が大きいだろうと思っております。

それから、ほかの発行者に比べて版が大きいということ。その分、情報量も多いだろうと思いますし、写真がきれいです。そして、アレルギーの内容については、内容と表示の見方等についてもしっかりと書いてあるということ。リスクコミュニケーションについても説明を入れているところでございます。また、全国の地域に伝わる織物の紋様なども紹介されておりまして、衣類に対する歴史や文化、日本に長く伝わる文化も大切にすることを示しているなと思っております。

同時に、このそれぞれの項目に関連する関連のページや、ほかの教科の関連項目も表示をしておりまして、確かに家庭の学習については、いろいろな分野の科目がかかわっているんだなということもしっかりと理解してもらえるのではないかと思っています。

2番目には、C者を推したいと思います。

これは消費者として、買い物の法律的な意味ですとか、消費者がなぜ狙われているのかなどについて、消費者関係の内容が非常にわかりやすく充実していると思います。また家族のあり方についてはロールプレイングを進めていることも非常に興味深いと思います。親子の会話、家族の会話なども進めていることは、自分たちの家族がどのようにして今後お互いのコミュニケーションをよくしていくのかという、いいトレーニングになるのではないかと思います。

また、C者については和服の部分についても非常に丁寧に書いてありまして、国によっ

て衣服の機能の違いというものを上手に説明してありますので、外国、北の国、南の国、あるいは宗教による衣服の違い等についてもわかりやすくなっているのがいいことだと思っておりまして、2番目にはC者にしたいと思います。

以上です。

○末廣委員　家庭という教科は、衣食住、実際の生活を送る上での生活の知恵を得るということが一番大きな目的かと思います。また、もし私が一人で生きていかなくてはいけないというときに、どの教科が社会で役に立つか、そういう観点もちょっと入れまして、いろいろと見てきましたが、第1にはA者、第2にはB者を推薦します。

特にA者の場合、情報量が非常に多いですね。やはり実際の衣食住、実際の生活の知恵を得るという点においては、情報量がたくさんあったほうがいいかと思います。例えば、食についてですね、料理をつくるその実習例が非常にたくさん出ています。肉料理、それから魚の料理、野菜料理、それからエコクッキング、これが出てきますね。それと弁当、そういうものも非常にたくさんの数になってきます。

それからコラムの資料も非常に内容が充実していますし、例えば食品の量の簡単な量り方、手量り、目量り、そういう何グラムとか言わないで、手でこうやって持ってこのぐらい、目で見てこのぐらいという、そういう方法もある、そういうことも書いてあって便利ではないかということで、A者がそういう点では非常に詳しいのではないかということで1番。

それからB者は、A者に比べると少しそういう点で劣るかなということで2番目に挙げました。

以上です。

○髙森委員長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言いただきましたが、集計した結果について、事務局お願いいたします。

〔集計〕

○髙森委員長　ただいまの集計結果につきまして、1位にA者を挙げられた方が4名、C者を挙げられた方が1名。2位にA者を挙げられた方が1名、B者3名、C者1名となっております。

結果として、1位にA者を挙げた方の数が4名と、最も多く過半数を超えております。このことにより、家庭につきましては、A者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて何か付帯意見等ございますでしょうか。

○樋口委員　C者の折り込みで立志式の話がありまして、今治市がやっているものだということで写真があるのですが、立志式ではなく、今治市の場合は少年式です。その点、本区は立志式として行っていますね。以上、意見です。

○髙森委員長　ほかいかがでしょうか。

（なし）

○髙森委員長　それでは、家庭につきましては、A者に仮決定させていただきたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○高森委員長　ご異議ございませんので、家庭についてはA者に仮決定いたしました。

それでは、A者の発行者名について、事務局お願いいたします。

〔発行者名公表〕

○高森委員長　それでは、仮決定した発行者名について公表いたします。発行者は、東京書籍でございます。これにより、家庭につきましては東京書籍に決定いたしました。

英語

○高森委員長　次に英語についてご審議を願います。

発行者は6者となっております。

それでは、各委員から採択すべき発行者について、順位をつけてご発言を願います。

私から順に発言をいたします。

英語はグローバル化社会を生きていく中では必須のスキルの一つではないかと思っておりまして、特にオリンピック・パラリンピック東京開催も決定いたしましたので、できるだけ英語の学習量を増やしたいと思っているところでございますが、海外に行って英語のスキルはどの学年で学んだものが最も活用されているのかといろいろな方に聞くと、大体中学英語だというように言われていますね。中学英語は本当に基本の基本だと思います。ですから、中学英語をしっかりやっておくことの重要性というのはある意味あるかなと思います。

しかし、最近はやはりどうしても会話偏重の部分が多く、あまり文法事項の詳しい段階的な学習はされていないような気がいたしました。私の時代は文法をそれこそbe動詞から始まって一般動詞へとだんだん段階を上がっていくわけですけれども、今はもう最初から一般動詞が出てくるような、Wh疑問文も頻繁に出てくるような構成です。そういった中でも、私は文法事項、それから書く活動の部分がどのくらいの割合を占めているのかということに興味をもって見ました。

視点としては、まず一つは英語を学ぶ意義がしっかりと意義づけられているかどうか。細かなところでは、「教室、学校で使う英語」に関してきちんと示されているか。活動の部分では、書く、話す、聞く、読む、それぞれの活動の占める割合はどのくらいなのか。新出単語はどのように紹介されているかどうか。やはり重要なところは文法ですね、文法事項の説明、まとめが適切に行われているかどうか。次は、実用編の部分で、買い物や電話をするとき、手紙の書き方を含めさまざまな項目がどのように説明されているか。それから、自分で学習するという意味では辞書の使い方についての解説が詳しいかどうか、そのようなところに視点をおいて比較をいたしました。

その結果、私はF者を1位に推したいと思います。第2位がA者です。

F者を選んだ理由は、書く、話す、聞く、読むの四つの活動の中で、比較的書く活動が多いのがこのF者で、全体の約22％を占めるということで6者中最多ではなかったかなと思

います。書くということは、文法事項をしっかりと学ばなければできない作業ですから、文法とリンクしていると思いまして、書く活動が非常に重視されているというのはちょっと興味を持てました。

それから単語の部分では、全ての教科書に新出単語は各レッスンの欄外、脚注等に書いてありますけれども、発音記号も1年生の付録で、母音、子音、これも各者同じですね。2年生から本文注記には併記されていますが、特にF者に関しては、1年次の148ページで、アルファベット順にアルファベット記号ごとの発音を示しているのが特徴で子音、母音も含めてそれぞれの記号ごとの発音が書かれています。これは、アルファベット記号固有の発音をつなげていくと、一つの単語の発音になることが学べるという意味では非常に興味深いつくりになっていると思います。よく外国人の方にわからない単語の発音を聞くと、それぞれのアルファベットの記号の発音を滑らかに言えば、そのきれいな発音ができるということを言われたことがありますので、それが実践できるのがF者だと思います。

また、辞書の使い方、これもF者は非常に抜きん出てすばらしいなと思うのは、1年生の37ページ、52ページ、53ページで、その紹介がされているのですが、他の発行者と違って、実際に辞書の画像が組み込まれていて、直感的にわかりやすい。イメージとして湧きにくい、画像が少ない、言葉中心の解説もほかの発行者の教科書にあったのですが、このF者に関しては、写真の画像が実際に添付されていて、非常に直感的で実際に辞書を開いたような様子がわかるので調べやすい、使いやすくなっているのかなと思います。

なお3年の巻末に、台東区在住の佐藤真海さんが出てきているのも特徴かもしれません。

一方第2位に選んだA者ですが、これは全体的にはバランスがとれております。内容も充実していると思うのですが、「教室、学校で使う英語」も6者中最多の項目数で紹介されていて、授業中に実際に教員がどういう英語を使って授業を進めていくかというのを、見れば大体わかるという、そういった意味では非常に便利になっています。

それから文法について、「文法のまとめ」というものが載っているのですが、書くレッスンに即したものとなっていますけれども、全体を見通すことが難しいので、巻末の付録などで網羅してほしかったかなというところでございます。例えば複数形の語形変化、三単現の動詞の活用変化、不規則動詞、助動詞などが一覧表で出てくるといいです。

文法的な事柄としてA者の特色は、冠詞の使用法が紹介されてます。英語で最も難しいのは、この冠詞の使い分けといわれてますが、「a」とか「the」の使い分けが載っていて、この辺りは充実しているなという気がいたしました。

辞書の引き方は画像が少なくて言葉中心の解説で、イメージが湧きにくいかなというところです。

実践の部分ですが、F者とA者を比べて、それほど差はないのですが、手紙の書き方や日常的な実用英会話の実践のコラムなどがあり、特にA者で工夫されているのが、「プロジェクト」というのがありまして、レベルアップしてプレゼンテーションやインタビュー、ディスカッションテーマ別、表現活動の練習などが特徴かと思います。

いずれにしてもA者は会話文が中心であるというところは、少し否めない部分であり、私はF者を1位、A者を2位に推薦いたしたいと思います。

○樋口委員　私は大学で、もう10年間になりますが、講義は全て英語、ディスカッションも全て英語、大学院も全て英語でという世界で教育をしています。今、委員長が言われたような状況は、まさに事実であり、惨たんたる状況であります。よく話せるのですけれども書かせると、まず文法がめちゃくちゃという状況です。特に英語を母語としない学生が、コミュニケーションはよく図れるのですけれども、書かせるともうめちゃくちゃというのが実態でございまして、我々はそれを正していくのに時間を相当とられているのが実情であります。それをこの教科書、中学のときから英語を学ぶというところで見た場合に、やはり話す、聞く、書くというバランスをとっていかないといけません。

よくきれいな英語と言いますが、世界においては標準語の英語はありませんので、きれいかそうではないかは問題外でお互いに通じればいいというのが我々の世界です。ちなみに我々のところはもう50カ国から学生が4年間の中に学んでいるのですが、きれいとかそうでないかとか言っている場合じゃなくて、通じればいいというのがコミュニケーション重視の英語でございます。

ただ、エッセーや論文を書く場合にはそれなりに通じないと話になりませんので、その通じるというのが、文法がしっかりしているということが条件になります。文法に従って書かない場合には、いくらおしゃべりができても単位が取れないという実態があります。TOEICが650などの学生でも、文章を書かせるとよくわからない文章が出てきて、彼らに修正を求めることが多々あります。

そういう視点から、やはりバランスがとれているのはF者であろうと思います。ですから第1はF者です。

F者はもう一つ重要なのは、学校の文化祭等々、いわゆる生徒に自分の体験から英語を表現させるという題材については、ほかに比べてすぐれておりまして、こういう題材で、英語で話してみたらということでは、自分の体験の中でこういう文化祭でこういう役割をした、こういうイベントをしたということについて、それを英語に直せばいいということですから、こういう題材をきっかけに話すチャンスを増やしていくという意味ではすぐれているという評価であります。

次に、同じような観点から、第2位はA者であろうと思います。

ですから、1位をF者、2位をA者ということでお願いしたいと思います。

○和田教育長　世の中のグローバル化に伴いまして、学校教育における英語学習がより重要性を増してきております。既に小学校においても低学年から英語学習が、時間数は限られておりますけれども取り入れられておりまして、その中身は主に会話を中心に英語に慣れようということで始まっているところでございます。

その気運は2020年の東京オリンピック・パラリンピックを目途にということで、今、一気に盛り上がってきているところでございますけれども、本区におきましても、他区に先

駆けてオリンピック・パラリンピック教育プランも策定いたしまして、いわゆるおもてなし英会話を各校で進めているという状況でございます。そういう意味でも、中学校の英語の授業はさらに充実させていかなければならないと思っております。

ただ、先ほど両委員もおっしゃいましたように、会話を中心とした資料がどうしても主流になってきつつあり、特に小学校はそれが中心でございまして、中学校に入った段階でどのように本来の英語授業に引き継げるかということも非常に大きな課題になっているかなというふうに思います。

会話、もしくは文法、どちらかを優先にというのもそもそも偏りがある話でございます。しかし一方で、とにかく話せればよいというならば、別の方法があるだろうと思っております。学校教育の中では単にしゃべれるようになるというよりも、むしろ言葉の知的な使い方をしっかり学んでいくということが必要だと思っております。

そういう意味で、今回の英語教材の選定につきましては、会話と読み書きとのバランスがどうなのかということを主軸に置いたということと、もう一つは、子供たちも、かなり英語については、学力のばらつきが見られるということがありますので、その点では、基礎を学べる子、そして発展授業を希望する子、その子たちに合わせられるような幅広い内容がレベルがいいかなと思っているところでございまして、その辺りを中心に見させていただきました。

その結果、私はA者を1番に推したいと思っております。

これにつきましては、先ほどバランスがとれているかなということと、その以前に小学校活動、小学校での英語活動を一旦きちんとおさらいするというようなところが、これは会話とはちょっと違う観点ではありますけれども、しっかりと12ページくらい使って示されているということ。

それから、英和辞典の使い方について1年生から提示されているということは非常に大事かなというふうに思っております。

2番目にはF者を推したいと思います。

F者につきましては、これもバランスで言いますと、本当に5：5ぐらいの非常にいいバランスで会話、そして読み書きと配置されているかなと思います。内容につきましても、これはA者もそうですが、教材数が全部で6者の中では多い部類に入っておりまして、子供たちの学習の中で非常に多岐にわたる学習が期待できるというふうに思っているところでございます。

樋口委員がおっしゃいました英語を母国語としない国民であるわけでございまして、そういう意味では、しゃべれればいいというだけにとどまらないような指導をこの教科書に期待したいと思っています。

以上です。

○末廣委員　英語は好きな子と嫌いな子が出る教科だと思います。その結果、相当学力の差がはっきりしてくる。学年が進めば進むほどそうなってくる。そういう教科だと思いま

す。そういうことをまず第一に考えて、やはりバランスのよい、それぞれの分野ですね、リーディングとかライティングとかリスニングとか、バランスがいい教科書がいいのではないかと思います。

そういう意味では、私はA者がバランスがいいと思います。特にA者の場合はリーディングの部分が多いかと。それから、巻末に単語が載っていますけれども、この単語の載せ方がもABCD順じゃなくて、場面に合わせたいろいろな単語、それを学校に関するもの、部活動に関するものというように、またいろいろな形容詞なども部門別にまとめている。それは生徒が使いやすいのではないかなという気がします。

文法が少ないかなという感じがしますけれども、A者がまず第1位。

それから、F者が第2位です。

F者のほうが感じとしてはレベルが高い、A者よりも高いものを目指しているかと思います。やはり、全体的な分量からいうとライティングの部分が比較的多いのではないかと思います。

ただ、先ほども申しましたように、皆が上に上がっていくということを考えますと、A者のほうがいいんかなというふうに思います。

以上です。

○垣内委員　英語はほかの先生方もおっしゃっているように、国際的にいろいろな場面で使われるわけですけれども、やはり聞く、話す、読む、書く、このバランスというのは非常に重要なところだというふうに私も思います。

ただ一方で、文法に関しましては、やはり中学レベルの基礎的な文法、構造さえわかっていれば、文章を短くつないでいけば言いたいことはかなり言えるというところもありますので、基礎基本をきっちり身につけられるような、そういうテキストがいいのかなということと、それから、これは私も留学して体験したところですけれども、やはり言葉というのは実際自分で使うので、体で覚える部分がどうしてもあって、そのときにはインプットする量といいますか、しゃべったり、それから書いたりということも大事ですけれども、やはりたくさんのことを聞いたり読んだりという、このインプットの部分が大きければ大きいほど、後のアウトプットもうまくできるというところもありましたので、私は特に読むことインプットの部分が多いほうを優先したいなと思っています。そういう観点から拝見いたしました。

いずれの発行者も非常によく工夫を凝らしていらっしゃって、小学校との接続もありますし、使い方の説明、それから穴埋めなどで学習を深めるといったこと。それから資料編にも工夫がなされているし、それぞれのお考えでバランスをとっていらっしゃるんだろうと思いますけれども、バランスとインプットで考えると、第1位はA者かなと思います。

また、語彙とか想定している学習者のレベルに、先ほど末廣委員もおっしゃいましたけれども、若干の差があるのかなというふうに思いましたので、基礎基本に忠実で、ここだけ完全に覚えておけばどこへ行っても通用できるという意味でA者が第1位。F者が第2位と

いうふうに考えております。

特にA者のいいところは、やはり英和辞典の使い方をかなり早い時期に説明した上で、語彙も多いということで、その次の発展はそれぞれの生徒ができるような基礎的な学力、基礎的なスキルも身につけることができると考えられます。第1位はA者、第2位はF者ということでお願いしたいと思います。

○髙森委員長　ただいま各委員から推薦する発行者についてご発言いただきましたが、集計結果について、事務局お願いいたします。

〔集計〕

○髙森委員長　ただいまの集計結果につきまして、1位にA者を挙げられた方が3名、F者を挙げられた方が2名。2位にA者を挙げられた方が2名、F者を挙げられた方が3名となっております。

結果として、1位にA者を挙げた方の数が3名と、最も多く過半数を超えております。このことにより、英語につきましては、A者に仮決定させていただきたいと思いますが、このことについて付帯意見等ございますでしょうか。

○樋口委員　このA者の教科書は進学志向の中学はこれを使っています。ところが、本区は学校間格差が深刻で、平均点が全国平均より上の学校が4校、全国平均以下が3校ですね。ですから、教える場合に相当注意をしないと、会話も、さあ話しましょうで話せる子供と、そうでない子供があります。何かというとイメージがわからないというところもあるかと思いますので、英語の教員は現場において、まず話をさせなければ、聞いても英語はできるようになりませんので、テキストを使うに当たっては、全国平均より下の学校の先生は努力、工夫をして英語を教えていただければと思います。

○髙森委員長　意見として、A者とF者で拮抗しましたが、辞書については、F者のほうが先に出ていますね。F者は37ページで、A者は86ページですから、F者のほうが早く辞書を取り扱っているような気がしますが。

それから、英語を学ぶ意義ということについて、あまり各者とも詳しく説明がないですが、なぜ英語を学ばなくてはいけないのか、わかっているようで具体的にその答えを先生方は持っていらっしゃるのかなというところでは、今回は話題にあがらなかったんですけども、E者は各学年の一番最初の見返しのところに、非常に簡単な言葉で、1年生は「新しい世界へようこそ」、2年生は「伝えよう理解しよう」、3年生は「世界とつながる、世界へ飛び立つ」といったテーマで英語学習の意義を非常に簡潔に説明していますね。これは中を見ていただくと、それほど難しい講釈は書いていないのですが、生徒の学習意欲をかきたてるような工夫になっているので、先生方にこういうものを参考にしていただいて、少しでも学習意欲をかきたてるような指導をしていただけないかなという、希望として申し上げておきたいと思います。

○和田教育長　先ほど辞書の使い方についてA者は早くから提示していて良いということを申し上げましたが、髙森委員長のおっしゃるようにF者のほうが早く辞書を取り扱って

いますね。すいません、私の勘違いです。ただ、結論としては私は変わりませんので、よろしくお願いします。

○髙森委員長　私も各委員のご意見を伺って、垣内委員がおっしゃったような、読む活動ではA者は一番すぐれていますね。自分の中学校時代、家庭教師に教わっていましたがほとんどが読む活動でした。丸暗記するくらいに読みました。それは文法事項を自然に身につけられるという非常に有効な手段だったことに最近気づきまして、確かに読む活動も大事かなと思います。同時に、私の家庭教師は読みながら書かせるんです。読みながら書かせて、それを次の週までに一日10回ずつやってくるようにと言うんです。さすがに丸暗記できて、応用も効き、テストの点数も良かったように思います。

○樋口委員　辞書を持たない家庭の子供がかなりいると聞いています。ある中学校では辞書が教室に備えてありますが、貸出はありません。これでどういうことになるかというと、学校でしか使えないわけです。そこでの教育をうまくしないと、これは家庭学習でこの辞書を使ってこれ読んできなさいというのは難しい場合があります。辞書を持っていないわけですから。

その一方で、先ほど申し上げましたように、進学を優先する学校では多くの生徒が辞書どころかほとんどが電子辞書を使い、塾も行っている状況です。この辺りのところで格差を意識して教育していかないと、いつまでたっても学校間格差ないしは能力格差が縮まらないので、教員の説明が本当に重要だろうと思います。

ですから、子供が辞書を持っているというのを前提としてはいけないと思いますので、その辺りは工夫のほどをお願いします。

○和田教育長　事務局に確認ですけれども、英語について中学生の段階で、今のご指摘のように辞書を持たない生徒について、例えばスマートフォンなどでインターネットの辞書機能などを使うということについて、例えば辞書を持っていないからそれで対応ということは、現実にはあるのでしょうか。

○指導課長　辞書の実際の活用状況については、こちらでも十分に把握ができておりませんので、今後は活用状況等についても把握に努めていきたいと思います。

○和田教育長　もちろん授業中にスマートフォンなどを使うわけにはいかないですけれども、例えば自宅で、確かにスマートフォンで辞書機能使えるということありますので、それで十分なんだという家庭ももしかするとあるのかもしれないなと推測したところでございます。

○樋口委員　大学では事実、スマートフォンでやっています。スマートフォンがだめで、電子辞書はいいという話にはならないのではないでしょうか。

○和田教育長　使っていいかどうかではなくて、実際に使うことにしているかどうかですね。要するに辞書がないけれども、スマートフォンがあるから大丈夫だよというふうに言っている生徒、あるいは家庭があるかどうか。その辺りをちょっとまた。

○樋口委員　電子辞書だったら単語1個で終わりです。辞書ならば用例があるから使い方

がいろいろ出てくる。そこの差は大きいです。

実際はどうでしょうね。やはり今は電子辞書でしょうね。

○和田教育長　電子辞書のほうが見やすいですよね。

○樋口委員　便利で、ポータブルです。

○髙森委員長　技術が革新するとペーパーを離れて、いろいろなものを活用するようなことになるでしょう。それは、いいことなのか悪いことなのかちょっとわかりませんが。

○樋口委員　教科書は皆さんに配られますけども辞書は配られないので、家庭の格差においてそういう学力差が出てきます。その辺りは工夫して、場合によっては辞書を貸すということもあり得ることだろう思います。

○髙森委員長　ほかいかがでしょうか。

（なし）

○髙森委員長　それでは、英語については、A者に仮決定いたしたいと思いますが、これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○髙森委員長　ご異議ございませんので、英語についてはA者に仮決定いたしました。

それでは、A者の発行者名お願いいたします。

〔集計〕

○髙森委員長　それでは、仮決定した発行者名について公表いたします。発行者は、三省堂でございます。これにより、英語につきましては三省堂に決定いたしました。

○髙森委員長　以上で中学校教科用図書については、全ての教科について仮決定いたしました。　指導課長から確認をお願いいたします。

○指導課長　それでは、ご審議いただきました内容につきまして、種目と仮決定した発行者を読み上げさせていただきます。

国語、三省堂。

書写、教育出版。

地理、帝国書院。

歴史、東京書籍。

公民、東京書籍。

地図、帝国書院。

数学、学校図書。

理科、東京書籍。

音楽(一般)、教育芸術社。

音楽(器楽)、教育芸術社。

美術、日本文教出版。

保健体育、東京書籍。

技術分野、東京書籍。

家庭分野、東京書籍。

英語、三省堂。

以上でございます。

○髙森委員長　ただいまの仮決定の確認についてご異議ございませんか。

（異議なし）

○髙森委員長　それでは、以上のとおり仮決定の確認をいたしました。

第６３号議案

○髙森委員長　次に、第63号議案についてご審議願います。

指導課長より説明をお願いいたします。

○指導課長　それでは、第63号議案、平成28年度使用台東区立学校特別支援学級教科用図書採択について、ご説明いたします。

特別支援学級の場合、児童・生徒の障害の実態や状況が年度ごとに大きく異なることから、毎年行うことになってございますが、原則といたしまして、検定済み教科書のほか、特別支援学校用の文部科学省著作教科書や児童の障害の種類、程度、能力、特性に応じて、教科用図書以外の教科書、いわゆる一般図書を採択することができるということになってございます。どの教科書が児童・生徒一人一人により適しているかということを設置当該校で検討したものをもとに、資料作成委員会並びに調査研究委員会で審査・検討いたしまして、その調査結果を報告書という形で7月30日の定例教育委員会にてご報告をさせていただいたところでございます。

なお、それぞれの学校からは松葉小学校5件、蔵前小学校9件、金竜小学校12件、柏葉中学校21件の採択につきまして、ご審議をいただきたくお願いいたします。

それでは、学校別に報告をさせていただきます。お手元の資料をご覧ください。

ページを開いていただきまして中ほど、左上に様式3(補助資料)と付してあるページをご覧ください。

まず1ページ目をご覧ください。こちらは蔵前小学校でございます。資料のとおり、計9冊となっております。

続いて松葉小学校でございます。計5冊なっております。

続いて3ページ目をご覧ください。金竜小学校でございます。計12冊となっております。

続きまして4ページ、柏葉中学校でございます。資料のとおり、計21冊となってございます。

本日、全ての学校の一般図書をご用意することは難しい状況でございましたので、一部の学校のものを資料として例示させていただいております。

以上、小学校3校、中学校1校における、平成28年度使用台東区立学校特別支援学級教科

用図書につきまして、ご審議のほどよろしくお願いいたします。

以上でございます。

○髙森委員長　特別支援学級の教科用図書についてご質問、ご意見などがありましたら、お願いします。

○樋口委員　やはり現場優先で、現場の先生方が使いやすい教科書を優先したほうがよろしいかと思いますので、私はこの提案をそのまま受け入れたいと思います。

○髙森委員長　一つ質問ですけれども、これは各学校の現況、児童・生徒の実態に合わせて先生方に選んでいただいたということですね。例えば、転校生が入ってきた場合に、その新しく入ってきた転校生に対してのケアというのはどのようにされるのでしょうか。

○指導課長　基本的には採択自体は毎年行われますが、この採択を経て購入した図書に、その後の変更はございませんので、基本的にはその学校に備えてある教科用図書で対応していくことになると思います。

○髙森委員長　その辺りは柔軟にやっていただけるということですね。

○指導課長　はい。

○髙森委員長　ほかございませんか。

（なし）

○髙森委員長　それでは、特別支援学級の教科用図書につきましては、説明のとおり仮決定することについてご異議ございませんでしょうか。

（異議なし）

○髙森委員長　それでは、以上のとおり仮決定いたしました。

ただいまの審議・仮決定した内容を基に、事務局が議案を用意いたしますので、ここで準備が整うまで休憩といたします。

概ね20分程度と思われますが、遅れることもありますのでご了承ください。

それでは休憩といたします。

（休憩・17：55～18：15）

○髙森委員長　では、引き続き会議を再開いたします。

初めに、第62号議案を議題といたします。

お手元に、休憩前に審議した内容に基づき、用意した議案がございます。

指導課長、説明をお願いいたします。

○指導課長　平成28年～31年度使用台東区立中学校教科用図書採択につきまして、次のとおり採択をいたしたくご審議お願い申し上げます。種目、発行者、教科用図書名の順に読み上げさせていただきます。

国語、三省堂「現代の国語」。

書写、教育出版「中学書写」。

社会（地理的分野）、帝国書院「社会科　中学生の地理　世界の姿と日本の国土」。

社会(歴史的分野)、東京書籍「新編　新しい社会　歴史」。

社会(公民的分野)、東京書籍「新編　新しい社会　公民」。
地図、帝国書院「中学校社会科地図」。
数学、学校図書「中学校数学」。
理科、東京書籍「新編　新しい科学」。
音楽(一般)、教育芸術社「中学生の音楽」。
音楽(器楽合奏)、教育芸術社「中学生の器楽」。
美術、日本文教出版「美術Ｉ　出会いと広がり　他」。
保健体育、東京書籍「新編　新しい保健体育」。
技術・家庭(技術分野)、東京書籍「新編　新しい技術・家庭　技術分野　未来を創るTechnology」。
技術・家庭（家庭分野）、東京書籍「新編　新しい技術・家庭　家庭分野　自立と共生を目指して」。
外国語(英語)、三省堂「NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition」。
　以上でございます。よろしくお願い申し上げます。
○髙森委員長　第62号議案は、先ほどの審議による仮決定の内容となっております。
　本件について、ご審議願います。
　ご意見等がございましたらお願いいたします。
○和田教育長　今回、この新たな教科書採択の結果を各現場へ通知をするのですけれども、その際に本日の議論で委員の方々から出たお話については、どういう形で伝えますか。あるいはそれはそのときではなくて、違う場でお伝えするなどの機会はあるのでしょうか。
○指導課長　決定として、この採択の内容をお伝えするのと、その後の一番近いところで、連合校園長会等の機会を通して学校長への周知を図ってまいりたいと考えております。
○和田教育長　本日のいろいろな付帯意見についてもお伝えすることになるのですか。
○指導課長　指導に生かしていきたい部分はもちろん、採択からは漏れましたが、指導の中での留意事項のご指摘として話題になったようなところについて、お伝えをしていきたいと考えております。
○樋口委員　ある教科書に決まったとして、それ以外に、資料、データは別の発行者のほうが良いという部分もあるかと思いますが、そういう場合、学校に検定教科書を全てそろえるということは不可能ですか。
○指導課長　現段階ではどのような対応ができるのか明確にはお答えできません。
○髙森委員長　教育支援館にはありますよね。全部そろっていますから。
○樋口委員　補助教材として、つけ加えて教壇で教えるということはあり得るだろうと思いますので。
○和田教育長　ただいまのお話ですけれども、基本的に教科書採択の際に、この全委員から出たお話については、当然、付帯事項として現場の校長会などに伝えさせていただきたいと思いますけれども、それに対する扱い、具体的な内容は、各校での対応に任せたいな

というふうに思っております。その際にもし、どうしても必要なものが出てくれば、それは教育委員会としてもそれなりの手だてはするというふうにしたいと思いますが、その辺りはご了承いただければと思っております。

○末廣委員　先ほど伺いましたが、教科によっては1年目はこれを使っていて、それで2年目にその他の発行者の教科書に変わったときに、齟齬が出る場合があるということを小耳に挟んだのですが、その辺りはどうですか。

○指導課長　そのことについては特別支援学級の教科用図書の扱いということで、毎年どの一般図書等を採用するかということを採択しておりますので、本日の中学校教科用図書採択については、これは平成28年度から31年度まではこの教科書を使用するということが前提になっておりますので、先ほど申し上げました1年ごとというのは、特別支援学級用の教科用図書がそれに該当しております。

○和田教育長　今の末廣委員のお話については、実は私が申し上げたお話、お伝えした話で、小学校の教科書で学習指導要領で2年単位で、要するに教科書の編成、その学習内容を取り込む形があり得ると。そうした場合に、奇数学年の生徒が次の偶数学年に上がるときに、引き続きそのまま同じ発行者のものを使わないと、2年単位の学習指導要領に追いついていけないという状況があるようだというお話を申し上げたのですけれど、その件でお話されたのかなと。

○指導課長　ちょうど国語などについてはいわゆる低学年、中学年、高学年という、二学年で目標や計画等が定められているという実態がありまして、現行の教科書から教科書が入れ替わったときに、偶数学年で次の奇数に上がるときの子供たちは教科書が変わってしまっても、その出版者がまた2年計画のいわゆる活動等を設定しておりますので問題ないのですが、奇数学年で終わって偶数学年に上がるという子供たちは、そこで出版者が変わってしまうと、いわゆる2年で一通りの学習を網羅しているというような状況なので、学習しない部分が出てしまったり、重複してしまったりする部分が出てくるというようなことがございます。

○和田教育長　今回はそれは。

○末廣委員　今回はどうなんですか。

○指導課長　今回については、それはございません。

○髙森委員長　ほかいかがでしょう。

（なし）

○髙森委員長　それでは、これより採決いたします。

第62号議案については、原案どおり決定いたしたいと思います。これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○髙森委員長　ご異議ございませんので、原案どおり決定いたしました。

次に、第63号議案を議題といたします。

指導課長、説明をお願いいたします。

○指導課長　平成28年度使用台東区立学校特別支援学級教科用図書採択についてでございますが、先ほどご審議いただきました内容につきまして、改めて、4校で使用する教科書は資料のとおりとなっております。ご審議・ご決定をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

以上でございます。

○髙森委員長　第63号議案は、先ほどの審議による仮決定のとおりとなっております。

本件についてご審議願います。

ご意見等、ございましたらお願いをします。

（なし）

○髙森委員長　それでは、これより採決いたします。

第63号議案については、原案どおり決定いたしたいと思います。これにご異議ございませんか。

（異議なし）

○髙森委員長　ご異議ございませんので、原案どおり決定いたしました。

以上で、教科用図書採択についての議案の審議は全て終了いたしました。

２その他

○髙森委員長　その他、何かご発言はございますか。

（なし）

○髙森委員長　それでは、以上をもちまして、本日の議事日程を全て終了いたしました。

これをもちまして、本日の定例会を閉じ、散会いたします。

午後6時26分　閉会